「成程……」
「伯父は遠からず連れて歸ると申しますけれど、わたしは歸らぬつもりでございます」
「して、永くこの地に留まるお考へか」
「いいえ」
「では、何處へ」
「あの、私はいつそ、生きて居るならばお江戸へ行つて暮らしたいと思ひまする」
「江戸へ」
「はい、江戸には叔母に當る人もございますから、それを頼つて、あちらで暮らして見たいと思つて居りまする」
「うむ、江戸で暮らす、それも亦思ひつきぢや」
「それにつきまして、あなた様には……關東へお立ちの時に……」
お豐は、ここまで來て言ひ淀んだやうでしたが思ひ切つた風情で
「突然に、こんな事を申上げては定めし、鐵面しい奴と、おさげすみでもございませうが、あなた様が關東へお下りの節……出來ます事ならば」
「……」
「あの、御一緒にお伴をさせて戴きたう存じます」

「一緒につれて行けと申されるか」
お豐を失望させるほど冷やかに龍之助は呑込んだともつかず、いやとも言ひ出さず、やがて
「それも宜からう、強ひてお止めは致さぬ」
やつと斯う云ひ出して、少し間を置き
「が、そなたが江戸へ行くことは、伯父上は勿論の事、ここの先生も、またそなたの御實家も皆不同意でござらうな」
「それはさうでございますけれど……若し故郷へ送り返されるやうな事になりますれば、生きては居られませぬ」
「ふむ――」
龍之助は團扇を下に置いて腕を組んで見ましたが、よく生命を粗末にしたがる女よと言はぬばかりの態度にも見えましたが、また極めて眞劍に何か考へて居るやうにも見えます。
さうして、しばらくつぶつて居た眼をパツと開いて
「宜しい、生命がけの覺悟ならば……」
この時、表の方で人の足音がやかましい。祭りに行つて居た家の連中が歸つて來たものと思はれる。

十一

その翌朝の事、藍玉屋の金藏は朝飯も食はずフラリと自分の家を飛び出しました。

「金さん、金藏さん」

長者屋敷の處で、横合から、火繩銃を擔いで犬をつれた獵師體の男が名を呼びかけたのをも氣がつかず通り過ぎようとすると、獵師は近寄つて來て金藏の肩に後から手をかけ

「如何した、金藏さん」

「やあ、惣太さん」

「何だい、えらく悄氣てるな」

「ああ、少し病氣だよ」

「大事にしたくちやいけねえよ」

「だから保養に、ここらを歩いて居るのだ、どうも頭の具合が面白くないからね」

「それでは金藏さん、今日は一日俺と高圓山の方へ行かねえか、山をかけ廻ると氣の保養になるぜ」

「そんな元氣がある位なら、斯うしてぶらぶらしては居ないよ、ああ、つまらない」

「困るな、では俺が近いうち猪の肉を切つて行くから一杯飲んで氣晴しをしよう」

「うん」

「まあ、大事にするがいい」

この獵師は惣太といつて、岩坂といふ處に住み、兎、鹿、猿、狐などの獸を捕つては生業を立てて居る。殊に猪を追ひ出すのが上手で評判をとつて居る。女房もあつて子供も三人ほどあるのに、酒が好きで女房子を食ふや食はずに置いては、自分は獲物の賣上で酒を飲んで歸つてくる。金藏とは飲み友達で、金藏はよく此の男に奢つてやつたり、狐の皮なんぞを賣りつけられたりして居ました。今、二三間行き過ぎた惣太は、何事かを思ひ出したやうに引返して來て

「金藏さん、金藏さん」

「何だえ」

「ホントに濟まないがねえ」

「うん」

「二分ばかり貸して貰ひたい、高圓山へ追ひ込んだ猪が明日の朝までには物になるんだ、さうすれば直ぐだ、直ぐ返すから」

「又かい」

「ナニ、今度は確だよ、どうも金藏さん、女房子が干物になる騷ぎだからな」

「貸して上げてもいいがね」

「さうして下さいよ、拜みまさあ、お前さんなんぞは何不自由のない一人息子だから、二分位は何でもあるまいが、こちらの身にとると其の二分が親子五人の命の種になるんだから」

「では、二分」

金藏は懐から、財布を取出して、二分の金をつまみ惣太の出した大きな掌に乘せてやりました。

「有難え有難え」

惣太は推し戴いて、また少し行くと今度はその後影を見て居た金藏が何か思ひ出したやうに

「惣太さん――」

「何だい」

「お前鐵砲を持つてるね」

「獵師に鐵砲を持つてるねと念を押すのも可笑しなものだね、この通り持つてるよ」

「その鐵砲といふ奴は、素人にも撃てるものかい」

「そりや、撃てねえといふ限りはねえが」

「ドノ位、稽古したら覘ひがつくだい」

何を考へたものか金藏は、それから毎日のやうに岩坂の惣太が家へ鐵砲の稽古に出かけます。惣太の鐵砲をかりては的を立てて、しきりにやつて居るので、少しづつは物になります。今日は三發共的に當てたので、得意になつて四發目に裏山の縦の枝にたかつて居た鴉に覘ひを定めて切つて放つと見事に失敗つて、鴉は啞々とも云はず枝を放れてしまつたから

「駄目々々」

惣太は傍から、ニヤリニヤリと笑ひ

「生き物は、まだ早い」

「それでも鴉ぐらゐ」

金藏は口惜しさうです。

「鴉ぐらゐがいけない、鴉ほど打ちにくい鳥は無いのだ。鴉が打てたら、鐵砲は黑人だよ」

「さうかなあ、一體、鳥では何が打ち宜いのぢや」

「さうさ、お前さんの打ち宜いのはそこに居る」

「馬鹿にして居る、あれは鷄ぢやないか、雉子か山鳩あたりを一つやつて見たいな」

「雉子を一つやつて御覽なさい、二三日うちに山へ伴れて行つて上げます」

「雉子が打てれば占めたものだ、それから兎、狸、狐、猪、熊――」

「さうなると、こちとらが飯の食ひ上げだ、併しこの間曾爾の山奥では、猪と間違へて人を打つた奴があるさうだから、金さん、お前もそんな事だらうから、わしの見ぬ處で煙硝いぢりは御免だよ」

「猪と間違へて人を撃つのは勘平見たやうなものだが、惣太さん、人を撃つのは餘つぽど六かしい

ものかい」

「俺も、永年獵師をやつて居るが、まだ人間を擊つた事はねえ……」

十二

夜も四ツに近い頃、三輪明神の境内には、も早涼みの人も少になつた時分、「おだまき杉」の下に、一つの黑い人影があります。

手に持つて居た小さい徳利を下に置いて、鑿のやうなもので、頻りに杉の根方を突付いて居ました。いい加減に突付いて見てから、その徳利を穴へ當てがつて見て、また突付き直します。杉の根方は盤屈して或は蛇のやうに走り、或は蓙のやうな穴になつて居る。その間を程よく取り擴げて、徳利を納める爲に他目もふらず突ついて居ましたが、ふいと、また一つの物影が、地藏堂の方から、ゆつくりと歩んで來て、この「おだまき杉」近くまで、やつて來たのにも氣がつかないやうです。このゆつくりと歩んで來たといふのは、誰であるか直にわかる、それは寢る前に必ず一たびは、明神の境内をめぐつて歩く植田丹後守であります。

丹後守は、今「おだまき杉」の近くへ來て、ふと、根方を突付いて居る忍びの人影を見つけたので歩みを止めて、何者が何をするかを、しばらく闇の中から、立つて見て居ました。

丹後守の歩き方は、まことに靜かで、草履をふんで歩く時は、歩く時も、止まる時も、さして變りのない程でしたから、根方の人は少しも氣がつきません。

しばらく見て居たが、つかつかと丹後守は近寄つて

「金藏ではないか」

「はい——」

物影は非常なる驚きで、バネのやうに飛び上つたのでしたが、わなわなと慄へて逃げる氣力もないもののやうに見えます。

「何をして居る」

丹後守は、押して穏かに問ふ。

「へえ……へえ」

「それは何ぢや」

人影の藍玉屋の金藏である事は申すまでもありません。

丹後守に指さされたのは金藏が、幾度も穴へ入れたり出したりして見た彼の徳利でありました。

「へえ……これは……」

「これへ出して見せろ」

「へえ、これでございますか……これは」

金藏は怖る怖る徳利を取つて、丹後守の前へ捧げます。丹後守は、手に取り上げて見ると徳利のやうに見えても徳利ではありません。長さ凡そ一尺位、酒ならば一升五合も入るべき黒塗り革製の「彈藥入れ」であります。

「金藏、これはお前のか」

「はい……」

「お前は、鐵砲を持つて居るか」

「いえ……人から借りました」

「借りた——飛び道具は危ないものだぞ、之れは拙者が預かる」

「へえ……」

「もう、有るまいな、まだ此んな物が家にあるか」

「もう有りませぬ」

「よし」

丹後守は「彈藥入れ」を取り上げて叱言も何も云はずに行つてしまひます。

この附近では丹後守に會つては

「左様でございます」

といふか

「左様ではございませぬ」

といふか

二つの返事の外は、餘り物を云へない事になつて居ます。丹後守が少しも强壓を用ひるわけではないが、自然そんな具合になつて居ました。

ああ、惡い人に惡い物を見つかつた。

さすがの金藏は、慄へ上がつて、身を支へる事も出來ないで、杉の幹へしがみついてしまひました。

金藏は獵師の惣太の手から、舊式の種子ケ島を一挺手に入れて、その彈藥は滅多な處へは置けないから、ここへ隱しに來たものです。町人が鐵砲を持つことは禁制であります。これが表向に現はれる時は打首か追放か、我が身は愚か、一家中にまで……こんな處へ彈藥を隱しに來るほどの考へ無しでも、その罪科の容易ならぬことは辨へて居るものと見えます。

證據物件は押收されてしまつた——

「ああ、首を斬られる！　今夜にも俺は縛られて打ち首になるのだ！」

金藏は恐怖極まつて地團太を踏んで見ました。

いつぞや、あの初瀨河原で盜人が斬られて曝された事がある、俺は面白半分に見て來たが、斬られたあとの首から、ドクドクと血が湧き返るのを見てから當分飯がまづかつた、俺も明日はあんなになるのだ——ああ、どうしよう、どうしよう。

無知な者は、罪を犯す時まではそんなに大それた事と思はないで居て、犯した時に至つて初めて、その罪の大きかつたのに仰天する。金藏は、一圖に何をか怨み恨んで鐵砲を習ひ出したが、今が今、その企ての怖ろしさに我と慄へてしまつたものです。

「如何しよう、如何しよう」

そこで、一人で踊り廻つて居るのでしたが、斯ういふ人間は、いい加減怖れてしまふと、あとは自暴になります。

「如何なるものか、お豐を隱したのは、あの丹後守だ、おれの鐵砲を知つて居るのも、あの丹後守だ、皆んなやつつけちまへ、どの道おれの命は無いものだ」

金藏は横飛びに飛んで、自分の家へ馳歸りましたが、その晩の中に親爺の金を一風呂敷と、自分が秘藏の鐵砲を一挺持つて、何處とも知れず逃げ出してしまひました。

翌朝になつて、金六夫婦の驚きは一方でない、近所組合の人も總出で騒いだが、結局金藏の行方は更にわかりません。

丹後守は彼の彈藥の事に就ては、何も云はず、ホツと胸を撫で下ろしたのは藥屋源太郎はじめ、お豐等でありましたが、あんな奴だから又何を仕出かすまいものでもない——安心したやうな、まだ心配が殘つて居るやうな、それでも金藏が居なくなつたので一先づ胸を撫で下ろしました。

金藏が居なくなつて見れば、お豐が植田の邸に預けられる必要はなくなつた。

お豐が再び藥屋へ歸つた時には、暗い心に薄い光がさして居た。

龍之助は、物の五町とは離れぬ處へお豐が歸つた其の晩は、どうも寢られない淋しさを感じた。さて、お豐は藥屋へ歸つて、いくらも經たないうちに、伯父の源太郎に向つて、龜山へ歸りたいからと言ひ出しました。

今まで死んでも歸らぬと言ひ張つた故郷へ、今日は我から歸りたいと言ひ出した事を伯父は、思ひがけなく驚いた位でしたけれど、當人にその心の起つた事は非常な喜びで

「それでは、わしが送つて行つて詫をしてやるわい」

大急ぎで旅立の用意をはじめました。これと殆ど時を同じうして机龍之助は、植田丹後守に色々と高恩の禮を述べて、これも關東へ發足の日取を定めました。

出立の前の日、藥屋源太郎が丹後守へ挨拶に出て

「あれも、御蔭を持ちまして、明日故郷へ送り返す事に致しましたから……」

一通りの暇乞の話を聞いた植田丹後守が

「わしが所に居る吉田龍太郎殿と申される御仁が、これも近いうち關東へ立つ、次第によりて同行を願うて見たら——」

式上郡から宇陀郡へ越ゆる處を西峠といふ。西峠の北は赤瀬の大和富士まで蓬々たる野原で、古歌に謠はれた「小野の榛原」はここであります。

西峠は一名を「墨坂」といふ、墨坂の名は古代史に著はる。「鳥立たづぬる宇陀の御狩場」といふのは宇陀の松山からかけて榛原より西峠、山邊郡に至るあたりを云うたものらしい。

古への「禁野」、推古の朝に藥狩の處、そこを伊勢路へかかつて東海道へ出る道と、長瀬越をして伊賀へ行く路とが貫いて通つて居ります。

日中は暑さを厭ひ、今朝の暗いうちに馬を仕立てて、三輪を立つた藥屋源太郎とお豐とは少し先きに、龍之助は二人の馬から十間ほど離れて、これも矢張り馬で、この西峠を越したのでありましたが、小野の榛原には、青すすきが多く、大きな松や樅が並木をなして生えて居ます。

仰いで見ると四方に山が重なつて、遠くして高きは眞白な雲をかぶり、近くして嶮しきは行手に立ちはだかつて、人を襲ふもののやうに見られます。

峠の上には雲雀が舞ひ、木立の中では、鶯が、氣味の惡いほど長い息で鳴いて居る、そして木の下蔭は露に重く、馬の草鞋はびつしよりと濡れる。

龍之助は、またも旅人の心になりました。

三輪で暮らした一月半は、再びは得らるまじき平和なものでありました。龍之助の生涯に人の情を染み染みと感じたのは恐らく前にも後にも此の時ばかりでありませう。

大和の國には神ながらの空氣が漂うて居る、天に向うて立つ山には建國の氣象があり、地を潤ほし流れる川には泰平の響きがある。

龍之助は、西峠の上に立つた時は遙かに三輪の里を顧みて

「さらばよ」

と壓を呑むだのでありましたが、今さきに行く、お豐の馬上の姿を見ると、そこに縹緲として、また人の香ひのときめくを感ずるのであります。

丁度西峠と榛原の間まで來た時に、向ふから、ただ一人、旅の者がこちらを向いて足早に歩いて來ます。

細い道でしたから、並木の方へよつて、源太郎とお豐の馬をも避けたやうに、龍之助の馬も避けて通りすがりに旅の人は、ふと笠の中から龍之助の面を見て、棒のやうに立つてしまひました。

この時、林の茂みと小土手の間に二人の獵師が、身を隱して、何か獲物を覘つてゐるやうな容子を

誰も氣がつきませんでした。この一人は誰とも知れず、ギョッとするほど人相の惡い男で、他の一人は金藏であります。

人相の惡い方は

「金藏、慄へてるな」

「ナニ、大丈夫だ」

大丈夫だと云つて見たが爭はれぬ、金藏は五體がブルブル慄へて物を云ふと齒の根が合ひません。

「度胸定めに、それ、彼方から旅人が來る、あいつを一つやつつけて見ろ」

人相の惡いのが、ふと木の葉の繁みから街道の遠くを見ると、ただ一人、この小野の榛原を東から歩み來る旅人があります。

「ドレドレ」

「それ、覘ひを着けて見ろ」

「うむ」

金藏は鐵砲を取り直して、構へて見たが支へ切れないと見えて、小土手へ銃身を置いて、目當と巢口を眞直に、向ふから來る旅人に向けて見ましたが

「やあ、速い、速い、恐ろしく足の早い奴だよ」

成程、向ふから來る旅の人の足の速力は驚くべきものです。土手へ鐵砲を置いた時に彌次郎兵衛ほ

どに小さかつた姿が、巢口を向けた時は五月人形ほどになり、速い速いと驚いた時は、もう、眼の前へ人間並の姿で現はれて居ます。

「丸で、飛んで來るやうだ、こりや天狗だ、魔物だ」

さすがの二人が呆氣にとられて居る中に、眼の前を過ぎ去つて、並木の彼方へ見えなくなつてしまひます。

「驚いたなあ！　足の早い奴もあればあるものだ」

人相の惡いのが苦笑ひをする。

しばらく、無言で、二人は旅人が過ぎ去つた方の路を、やはり木の葉の繁りから一心に見つめて居たが

「それ、來たぞ！」

「やあ、やあ」

金藏は聲と共に胴震ひをはじめました。人相の惡いのは平氣なもので

「いいかい、金藏、よく度胸を落ちつけろ、それ前の奴が親爺で、後のが女だ、オヤオヤ武士の見えぬのはヲカしいぞ、兎に角、前の親爺をドンと一つ、いいか、あとはおれが引受ける」

申すまでもなく、二人が覘ふ當の的先を通りかかる前のは藥屋源太郎で後のはお豐であります。

机龍之助は、どうしたか、まだ姿を見せない、さうだ、さつき通りかかつた、あの足の早い旅人と

行き違ひになつて何か間違ひでも出來はしないか。

丸きり執念のない者と、どこまでも執念の深い者は、どちらも始末に困ります。

金藏の執念は、たうとう此處まで來てしまつた。慄へながら鐵砲の覘ひをつけて居る處を見れば可笑しくもあるが、面の色を眞蒼にして命がけの念力を現はして居る處を見れば、すさまじくもあります。

「モツト落着いて……馬の腹を覘へ、馬の腹と人の太股を打ち貫く氣組で、まだまだズツト近くへ來た時で宜い」

傍で力をつけて居る人相の惡い獵師は、最初に金藏に鐵砲を教へた惣太とは違ひます、惣太は飲んだくれであつたけれど、これほどの惡い度胸はない。

これは針ケ別所といふ處に住んで居て、表面は獵師、內實は追剝を働いて居た「鍛冶倉」といふ綽名の惡黨であります。

金藏が、この鍛冶倉の乾分となつたのにも相當の筋道があるけれどそれは省く。

「お豐、いいあんばいに、お天氣ぢや、今夜は內牧泊りとして、それまでに夕立でも出なければ何よりぢや、おお吉田樣が見えない、どうなさつた」

藝屋源太郎は、あとをふり返つて囁くと、お豐は

「如何なさいましたでせう」

「馬の草鞋でも解けたのであらう、馬子さん、少し靜かに歩かせてお呉れ」

馬を靜かに歩かせて

「あの御武家は、エラク武藝がお出來なさるとお陣屋の先生が賞めて居ました」

「さうでございます、お陣屋へ修業者が參りましても、手に立つ者は無かつたと、皆のお方も申して居りました」

「けれども、口を利きなさるのが、何だかサツパリし過ぎて、その癖、いつでも沈んで、何だか氣味の惡いやうな、逞ましいやうな、妙に氣の置けるお方ぢや」

「それも、お家にお子供さんが居らつしやるし、奥樣も亡くなりなすつたさうですから、それやこれやの御心配からでございませう」

「そんな事かも知れぬ、併し、まあ道中も、あのお方がお居でなさるので安心ぢや、時にあの馬鹿者の金藏……ああいふ、執拗い奴もないものだが、あんなのが行く行くは胡麻の蠅、追剝、盜人、そんな事に落ちるのだ、心がらとは云へ、氣の毒なものだ」

お豐は何とも云はないで、また後をふり返つたが、龍之助の姿はまだ見えない。

「叱ツ――――まだまだ」

林の繁みに覘ひをつけて居た金藏は此の時赫としてあはや火蓋を切らうとしたのを、あわてて傍に見てゐた鍛冶倉が押へたのは、時機まだ早しと見たのであらう。

この日の朝、三輪の里なる植田丹後守は、しきりに胸さはぎがします。

丹後守といふ人は、妙な人で時々前以て物を言ひ當てる事があります。

「お前の家へ昨夜、子供が產まれはせぬか」

ある時、或家の前へ立つて斯ういうた時、その家の主人が眼を圓くして

「大先生、まあ、どうして御存知でございます、まだ何處へも沙汰をしませんに」

「さうか、それは男の子であらうな」

「左樣でございます、如何してそれがおわかりになりました」

「そんな夢を見た、何にせよ目出度い事だ」

といつて立ち去つてしまつた事がある。

また、或時、借金の爲に財產を亡くしかけて、首を縊らうか、身を投げようかと思案しながら道を歩いて居る町の人に出遭した事がある。

「李右衞門、お前は何を心配して居る」

「へえ……」

「お前の後には死神がついて居るぞ」

「ええ……」

男は、慄へ上がつて後をふり向くと、丹後守は笑ひながら

「もう少し前へ出ると金神が待つて居る」

丹後守は此の男の爲に借金と死神を拂つてやつた事があります。こんな事は丹後守にあつては珍らしい事ではなく、雨が降る事、風の吹く事、火事の事なども前以て、よく言ひ當てたものです。

龍之助一行を送り出して置いて、しきりに胸さはぎがしたので、讀みかけた本をふせて、丹後守は座右の筮竹と算木とを取つて易を立てて見ました。さうして

「內山殿、內山殿」

二聲ばかり呼んで見ました。

「はい」

いつぞや、龍之助を玄關に迎へた處の青年でありました。

「あのな、甚だ御苦勞だが、貴方と、それからモ一人、高江氏を煩はしたらばと思ふが、ちよと近い所まで行つてもらひたいのぢや」

「承知致しました、何れへ」

「初瀨の町から西峠の方へ、急いでもらひたい、馬を飛ばして見てもらひたいのだが」

「心得ました、して御用向は」
「どうも、最前送り出した、あの吉田氏と藥屋の者、あれがどうも氣がかりぢや、たしかまだ西峠へかかるまい、せめて、あの原を越えるまで、御兩所でお送りが願ひたい」
「心得ました」
「いや、まだ、お待ち下さい」
丹後守は、急いで立たうとする青年を再び呼びとめて
「少々お待ちなさい、貴殿は鐵砲が打てましたな」
「はい、少しは」
「どうか、これを持參して下さい」
丹後守は戸棚の中から桐の箱を取り出して、打ちかけた紐をとくと手に取り上げたのは一挺の拳銃であります。
この時分、拳銃は餘り見た事がないのであります。然も、今丹後守が取り上げた拳銃は、全く、類の見えなかつた洋式のものであります。内山は、先生が妙なものを持つて居ると怪訝な面に、その拳銃を見つめます。内山が不思議がるのも、その道理で、これは「引落し式」と名づけられた前裝の六連發であります。これと同じ品が嘉永六年ペルリ來朝の時、武具奉行の細倉謙左衛門に贈られた事がある、鐵砲がはじめて日本へ來たのは、天文十二年（或はその以前）といふ事であるが、拳銃が日本

へ來たのは、この時が、その最初でありました。
今、丹後守が取り出したのは正にそれと同じ型のものであります。
どうして丹後守が、そんなものを何時の間に手に入れたか、それさへ不思議でありましたが、丹後守といふ人は、春日の太占を調べ……傍には阿蘭陀の本を讀み、今易筮を終つて次に舶來の拳銃を取り出すといふ人であります。
それで、右の拳銃を右手に取り上げて眼先へ伸ばし
「内山殿、その簾を捲き上げて戴きたい」
「心得ました」
簾を上げると庭である。
「あの植木鉢を一つ打つて見ませう」
花壇の隅に伏せられた素燒きの植木鉢に覘ひをつけたのでありましたが、轟然たる響きと共に鉢は粉に碎けます。
「いざ、これを持つてお出で下さい」
内山は、呆氣にとられながら、丹後守の渡す拳銃を受け取つて見ると、筒先きは六瓣に開いて、蓮の實のやうに六つの穴があります。
「その一發は今擊つてしまひました、あとの五發續けざまに擊てるやうになつてゐる」

「はあ」
内山は、それを調べて二三度構へて見ましたが
「然らば――」
と云つて立つと
「あの、まだ奥に文四郎流の火縄があります、高江殿にはあれを持つてお出でなさるやうに」
「心得ました」
何にしても大業な事である、わづか二三の人を送るに駿馬に乗り、飛び道具を用意するとは丸で合戦に向ふ沙汰である。

彼の足の早い旅人は、西峠を越えて來る机龍之助の馬を避けて通す途端に馬上の人を見上げたのであります。
龍之助も、ふいと笠越に見下ろすと
「や」
旅の人は、覺えず足を踏みしめたやうでしたが、龍之助は別に何とも思はず、そのまま馬を進めようとすると
「モシ、御武家様」

旅の人は、引き戻すやうに手をあげて呼び止めます。
「何か御用か」
「あなた様は、もしや――武州澤井の若先生ではございませぬか」
「ナニ、澤井の――」
龍之助は、この時、馬をとどめさせて、この旅の人を見据ゑて見ると、年の頃は五十に近からう、百姓體の男でどうも見たやうな男ではあるが、急には思ひ出せない。右の男は、被つて居た笠の紐を解きかけながら
「間違ひましたら御免下さいまし、あなた様は澤井の机彈正様の若先生、あの龍之助様ではございませぬかな」
不思議な旅の男の言分を、じつと聞いて
「いかにも――拙者はその机龍之助」
これを聞いて旅の男は
「左様でございましたか、それで安心致しました、私共は、あの青梅在、裏宿の七兵衛と申す百姓でございます」
「青梅の――七兵衛」
萬年橋の上で、拔き打に其の腰を斬つて逃げられた事がある、その盜賊がこの七兵衛であることは、

斬られた七兵衛はよく知つて居るが斬つた龍之助は、それを知らない。
「何處へ行くのだ」
「いや、何處へでもございませぬ、あなた様をたづねて、これへ參りました」
「ナニ、拙者をたづねて」
「はい」
「拙者に何の用」
「その御用と申しますのは、あなた様のお生命を……」
「生命を……」
ここに至つて龍之助は冷笑した。
「御驚きでもございませうが、あなた様のお生命が欲しいばかりにこの年月苦勞を致して居る者があるのでございまする、四年以前に御嶽の山で、あなた様の爲に非業の最期をお遂げなされし宇津木文之丞様の恨をお忘れはございますまい」
「文之丞の恨」
「その恨を晴らさんが爲、文之丞様の弟御に兵馬様、あなたを覘うて、この大和國に居りまする、ここで、私共があなた様をお見かけ申したが運のつき、どうか、兵馬様と尋常の勝負をなすつて上げて下さいまし、お願ひでございます」

「尋常の勝負！」
龍之助は、苦笑ひして
「その兵馬とやらは幾つになる」
「ことし十七でございます」
「勝負は何時でも辭退はせぬ故、まづ當分は腕を磨くがよからうとさう申して呉れ」
十七の小腕を以て、我に尋常の勝負を望むとは殊勝に似て小癪である。
「いやいや、勝負は時の運と申します、兵馬様とて、まんざらの腕に覺えがなければ、敵呼ばはりは致しますまい」
七兵衛は笠を取りながら
「兵馬様は、ただ今八木の宿に居られまする、これより八木の宿までは八里もございませう、私は一時が間に、そこまで御注進に上りまするほどに、あなた様にも武士の道を御存知ならば、それまでこれにお控へを願ひたい、引返して御立會下さるならば、八木、櫻井、初瀬の河原、あのあたりで、程よき場所を定めて晴れの勝負を願ひたいもので」
七兵衛はジリジリと押しつめるやうに龍之助に返答を促したが、龍之助は取り合はず
「勝手にせよ」
腮で馬子に差圖して靜かに馬を打たせようとする。

「お逃げなさるは卑怯ではござりませぬか」

七兵衛がやや冷笑を含んで言ひ放つと、龍之助は

「机龍之助は逃げも隠れもせぬ、これより伊勢路へ出て、東海道を下る、宇津木兵馬とやらにさう申せ、敵に合ひたくば、あとを慕うて東海道を下つて參るやうに、追ひついた處で何時なりとも望みのままの勝負」

七兵衛が尚ほ何をか言はんとする時、林の中の何處からともなく轟然と鐵砲の音！　つづいて、人の絶叫！

ここに引かかつてやり過ごしてしまつた源太郎とお豐の身の上が心許ない、龍之助は七兵衛を打捨てて馬を急がせる。

藥屋源太郎だけ、ただ一人、道の眞中に打ち倒れて居る。

その乘つた馬は向ふの樹の根に身震ひして立つて居るが、馬子の姿は見えない。

お豐に至つては、馬も馬子も諸共に、何處へ行つたか見えないのである。

龍之助は、馬から飛び下りて、源太郎を抱き上げた。

彈丸は股を貫いたらしく、致命の傷ではないけれども、驚きの餘りに氣絶して居る。

「源太郎どの、源太郎どの」

呼び生かすと、

「むむ」

「氣を確かに、傷は淺い」

「ああ……吉田樣、早く、お豐を早く……」

源太郎は氣がつくと直ぐに、手を上げて藪の彼方を指すのであつた。思ひ設けぬ不覺である、道中かかる事の萬一にもと、丹後守が心添してつけられたものを、まだその國境を離れない先きに此の有樣では、何と申譯が立つ。

人に申譯ではない、大切の守り人を眼前に奪はれて、武術の冥利が何處にある。

そればかりではない、お豐は奪はれてならない人である——物に冷ややかな龍之助も、齒を噛んで憤つた。

「源太郎どの、賊は幾人ほどぢや、何か見覺えはないか」

「たしか二人——わしを擊つて置いて、お豐を引捉へて、馬に乘せて、あちらへ、あちらへ」

源太郎の介抱を馬子に任せて置いて龍之助は立つて前後を見る。乘つて來た馬は駄馬である、所詮敵を追ふべき物の用には立たぬ。

少し北へ寄つた原中に、一つの小高い塚、その上には大きな松が聳えて居る。

すすきの茂る小野の榛原、龍之助は兎も角も、その塚までかけつけて、眼の屆く限りを見渡す。た

だ茫々たる原野につづく密々たる深林と、遠くは峨々たる山ばかり、人の氣配は更にない。

「ああ……」

溜息をつくと共に冷然たる己れに返つた、いくら尋ねても無駄！　案内知つた者ならば、この野原を何れの方角へでも逃げられる、逃げて窮すれば、山の中に入る——山でいけなければ谷へ隱れる、不知案内の自分が、いくら追うたとて所詮無益である。

龍之助には、咄嗟の間にも利と不利とを判斷する冷靜があつた。

十四

奈良の春日神社の前、宇津木兵馬は茶屋へ腰をかけ笠の紐をとく。

「ええ、毎年五月には子を產みまする、これはつい此の間生れたばかりでございます、エエ、もう人間と同じこと、この鹿は一頭で一つしか子は產みませぬ、產まれると、煙草一ぷくの間に、もうひよこひよこと歩き出しますでございます、紅葉ふみわけ啼く鹿と申しましても秋は子を產む時ではございませんで、妻戀ふ鹿と申しましてつまり夫婦和合の時でございますな」

茶店の主人は鹿の話から初めて

「さやうでございましたか、春日様は藤原家の氏神でございますがもとは鹿島の神様のおうつしでございますから、やはり、御武家様方の守り神でございます、春日四所大神と申しまして、その第一殿が常州鹿島の明神、第二殿が下總香取の明神と申すことでございまする」

案内をかねて、よく物事を敎へて呉れる。

兵馬は、ここで一寸聞いて見たくなつた事は　この奈良の土地から起つた寶藏院流の槍の道場のあとが、まだ此の地に殘つて居るとの事であるが、それが今如何なつてゐるかといふ事でした。

「ええ、ええ、鎌寶藏院の槍の道場も、此の興福寺の寺中に跡だけは殘つてゐるのでございまする、春日様へ御參詣をなすつて、二月堂の方から大佛へおいでになり、それから入らつしやいますと其處に道場だけは殘つてゐるのでございますが、槍をお使ひなさるお方なんぞは一人もおいではございませぬ」

云はれた通りに來て見ると成程鎌寶藏院の槍の名殘の道場、棟行は十二三間もあらうか、總拭の板羽目で、正面には高く摩利支天を勸請し、見物の處は上段下段に別れて道場の中は廣々として居る。此處でも案内の僧は、よく說明して聞かせました。

「御承知でもございらうが、この寶藏院流槍の開祖は、當院の覺禪房法印胤榮と申して、もとは中御門氏でございつたが、僧徒に似合はず武藝を好んで、最初は劍術を上泉伊勢守に學ばれたものぢや、後に大膳太夫盛忠といふものについて槍術を覺え、それより自ら一流を開いたものでございるが、もと武藝は出家の心でない、覺禪房は刀槍を好んで、斯くは一流を開きましたなれど、內心はこれを欣ばれ

ぬぢや、わが後の者必ず武藝を學ぶべからずとあつて武器兵器は悉く人に授けて、この寺へは一本も留め置かぬ、されば道場の名は殘るといへども、覺禪房限りで、表面この流儀のあとが絶えたわけでござる」

「斯く覺禪房は出家として武藝を後に殘すことを好まれなかつたが、門下には錚々たる豪傑が居つたぢや、先づ、權律師禪榮といふのが、やはり當寺の僧徒で稀代の達人、これが寶藏院のあとをつぎ申して、相變らず槍をやつて居られたやうにござる、一方俗人の方に於ては中村市右衛門尙政といふ者が、これが寶藏院覺禪房直傳ぢや、いま天下に行はれる當流の槍は、この中村の流れを汲むが多いといふ事である」

案内の僧は慣れてゐると見えて、息をもつがず滔々と述べ立てましたから兵馬は

「このあたりにて、寶藏院流の槍をよくする御仁は誰々でござらうな」

と尋ねて見ると、

「さればさ……」

案内の坊さんは少しく首をひねり

「當今、伊賀の名張に下石といふのがある、これに寶藏院流正統が傳はつて居るといふ話ぢや、慢僧は詳しいことは知らぬ、それにまた、術の妙を得た人にはこの、近い處——」

坊さんは顎で、南の方をしやくつて

「三輪大明神の社家に、植田丹後守といふのがござる、これが當流の槍を仲々よく使ふさうぢやが、これも一向噂ばかりで、誰も其の實際を見たものはないと申すことぢや」

「何と申されました、三輪大明神の社家で、植田丹後守殿」

「左樣、植田丹後守、なかなか學問もある、武藝修業ならば一たびは訪ねて見て御覽じろ」

十五

宇津木兵馬が植田丹後守をたづねた時、植田の邸は何か非常に取り込んで居るやうでしたが、それでも丹後守は兵馬の訪問を拒まずに座に通して武術の話をしました。

「お若いに近ごろ殊勝でござる、して劍道の御流儀は何をお究めなされましたな」

「幼少の頃、甲源一刀流を少しばかり、數年以前より直心影の流れを汲みまして、未熟者相當の修業中でござりまする」

「ナニ、甲源一刀流」

「兄なる人につきまして、その手ほどきを受け、それより江戸に罷り出でて直心影の門末に列りました」

「直心影は至極の流儀ぢや、して御身の師とお頼みなされしは何と申される御仁か」

「下谷御徒町にて、島田虎之助と申しまする」
「ほう、島田虎之助？」
丹後守は何か思ふ仔細のありげに
「その島田虎之助殿は、もと豐前中津の藩中でござらうがな」
「いかにも、仰せの通り」
「號を見山と申される」
「左様にござりまする」
「そのお人ならば、拙者も近づきがある」
「それは意外に存じまする、何れにて御近づきでござりましたか」
「ずつと以前、も早二十年も昔の事、拙者のこの道場に暫く足を留めて居られた事がある」
「それは、不思議の因縁にござりまする」
「拙者が、今までに拜見致した劍術では、江戸で男谷下總守、筑後柳川の大石進、それから只今申す島田虎之助殿、この三人が至極とお見受け申した、尤も近ごろは江戸に有名な達人が多く居られるさうな、拙者も彼是三十年あちらへ參りませぬ故、これは三十年も前の話で、今は何とも申されぬが、先づ島田殿ほどの名人は、十年や二十年に幾人と現れるものでなからう、よき師匠をとり得てお仕合せに存じまする」

師匠のよい評判を聞くことは、兵馬に取つて自分のことを聞くやうに嬉しい、何處へ行つても島田虎之助の劍術を賞める言葉を聞くけれども、今日この人の口から聞くと餘計有難く思はれる、丁度、最初に机彈正から島田虎之助の名を紹介された時と同じやうな確信をもつて話して居るやうに思はれる。人の技倆を、それだけに見るほど、この人の修養もそれだけに深いものと思へば、奥床しい思ひがする。よい人に會つたと兵馬は謹んで其言ふ所を聞いて居ると
「島田殿は珍らしい人ぢや、こちらから話しかければ、いくらでも聞く、聞いたばかりで自分は何も話らぬ」
丹後守は自分で自分の事を言つて居るやうです。丹後守として此んなに話しが撥んで行くのは、これまた珍らしい位でした。
「あの時分、島田は鐵砲玉ぢやといふ綽名があつたさうな、それは行つたきりで戻つて來ない、つまり、こちらから話しをしかけるとそれを受け入れたばかりで、手答へがないのぢや」
「只今も、その通りでござります、それ故に島田は奥行が知れぬと申す者もござりまする、劍術ばかりで頭は空ぢやと申す者もございまする」
「さうでござらう、拙者の邸に足をとどめて居られる頃も、夜更けまでじつと考へて居て、修業者が來ても立會ひといふことは、ほとんどせぬ、強ひて立會を望むと、斯うして相手の面を、しばらくじつと見て居るぢや、さうして二コリと笑つて、立會はせんでも勝負はわかつて居ると斯う申して、

それきり、これには相手も弱つた」

「併し、日さましい立會も一度や二度は、あつた事でござりませう」

「いや、凡そ一ケ月の間に、一度も左樣なことはない、ただ一度、拙者と槍を合せた事がござる」

「あ、槍の御高名を承はりました、それ故、一手の御教授を下し置かれたく推參致しました次第でござりました」

「槍の高名——滅相な事ぢや」

丹後守は忽ちに打ち消してしまひましたが兵馬は其の機會を外さずに

「寶藏院流の槍は、三輪大明神の社家植田丹後守殿に傳はると承はりました」

「以ての外、當今寶藏院の槍は伊賀の名張に下石と申すのがござる、これがよく流儀の統をわきまへて居られる筈、彼處へお越しの時に立ち寄つて御覽じろ」

丹後守は、再び槍の話はさせないやうに言葉を避けるから兵馬も、この上押すことは出來なくなつて憮然として居ると

「最前仰有つた甲源一刀流のこと、ついこの間も、その流儀から出でたものらしい、これも珍らしいお人が見えた」

「甲源一刀流の」

兵馬は、さう聞いて少しく氣色ばむ。關西に於ても甲源一刀流を學んだものが無いことはないけれ

ども其の流名を聞くことは甚だ稀である。その流名を兵馬が聞けばきつと思ひ當ることがある。

「その、お人と申すのは、如何樣の人にござりしや、少々思ひ當ることもあれば」

「その構へが無類ぢや、じつと竹刀を青眼にとつて、ただ其の儘の形……」

「さては——」

兵馬は我知らず膝を進めて

「年の頃は」

「卅三四でもあらうか」

「顏色青白く、眼は長く切れて、白い光を帶びた人ではありませぬか」

「その通り」

丹後守の無造作に頷く時、兵馬の眼は燃ゆる。

十六

「ああ、惜しい事をした、貴殿のお出でが三日早ければ……」

丹後守は、兵馬から机龍之助の身の上と、兄が遺恨のあらましを聞いて兵馬の來ることの遲いのをくやんだが

「どうも、あの宇陀の山を南に吉野山中に迷ひ込みはせぬかと思はれる、只今人をかけて行方を捜索中であるが、もしあの山中へ迷ひ込んだ事なら、容易に見つからぬ」

兵馬は、一たびは力を得、一たびは失望し、さてこの上は自分も吉野郡の山中へ踏み込んで何處までも行方を探すばかりだと覺悟を決めました。

斯う覺悟をきめて見ると、ここに悠々として居る必要はない、例の寶藏院の槍の事も、この場合強つての所望でもないのですから

「よき、手がかりを得て忝う存じまする、早速に拙者は仇のあとを追うて、吉野の方へ參ることに致しまする」

「それも宜しうござる、お留めは致さぬが、併し兵馬どの、拙者の見受け申す處では、その机龍之助とやらは稀代の遣ひ手である、ほとんど今の世に幾人とない遣ひ手である容子ぢや」

「その事は心得て居りまする、憎むべき敵なれども、劍を取つては甲源一刀流に於て並ぶものがございませぬ」

「元より、貴殿とても、島田虎之助殿、取立の事なれば、抜かりもござるまいが、何を申すもまだお年若」

「左様にござりまする」

「殊に、あの太刀先きが難劍ぢや、凝と青眼に構へて、些とも動かず、相手の出る頭を待つて打つといふ流儀と見受け申した」

「いかにも左様でござります、あれは關東の劍客が、名けて〈音なしの構へ〉と申し、彼の龍之助が一流の遣ひ方でござりまする」

「さうでありませう、さて、兵馬殿、失禮ながら、御身にはその音なしの構へとやらをどの様にあしらはれる、その工夫は……」

「工夫とては更にございませぬ、ただ此の太刀先に柄も拳も我身も魂も打ち込めて、彼が骨髓を突き貫く覺悟でございます」

丹後守は其の一言を限りなく喜んで

「それでなくては可かぬ、それならば必ず討てませう、よし相討になるまでも、我の受ける傷より敵に負はす傷が深い……時に兵馬殿、わしが家の道場を見て貰ひたい」

「有難き仕合せ」

丹後守は兵馬をつれて邸内の道場へ來ると、今まで話が槍術に亘る事をすら避けて居たのに、ここで我から進んで身仕度をして襷をかけ稽古槍をとり下ろしました。さては見處があつて兵馬の爲に寶藏院流の槍の祕術を示す爲か知らん。

十七

話しがまた少し戻つて來ます。

榛原の山道で藥屋源太郎が打たれた時、机龍之助は其の鐵砲の音を聞いて駈けつけたが、七兵衛は早く兵馬に知らせたい事に急がれて鐵砲の音には心を殘して西峠まで走せて來た時、そこで行き逢つたのが駿馬に乘つた二人の武士。

この二人の武士も亦時ならぬ鐵砲の音に驚いて

「さては」

と丹後守の言つた事を思ひ合せた處へ、打つかつたのが七兵衛でした。どうも斯ういふ場合に七兵衛の足どりが穩かでない。

「待て」

摺れ違ひの時に、内山といふ若い方の武士が鋭く七兵衛を呼び留めました。

「へえ……私共でございますか」

「お前は、今向ふから來たやうだが、あの鐵砲の音は何事だ」

「一向存じませぬ、大方獵師さんが雉子でも打つたんでございませう」

元より七兵衛は何も知らない、若し間違でもあつて拘はり合ひになつては面倒だから、いい加減にあしらつてサツサと歩き出すと、内山は餘ほど七兵衛を怪しい者と認めたらしく

「待て待て」

「いや、急ぎますから、私共は急用の者でございますから」

「待てといふに待たぬか」

七兵衛は足が早い、それを弱身があつて逃げ出すものと認めたらしく、内山は丹後守から預つて來た「引落し式」の拳銃を七兵衛のうしろから差向けて、威すつもりで切つて放した彈丸が、七兵衛の右の頰のわき凡そ一尺位の處を風を切つて通ります。

「何をなさいます」

これには七兵衛も驚いた、いくら七兵衛が足が早いとても、鐵砲の玉にはかなはない。足をとどめて振返る途端に左手の林の中へ飛び込みました。

馬上の兩人は彈丸に驚いた七兵衛が、立ち竦んでしまふだらうと豫期して居た處を、彼は驚くべき機捷で林の中へ身を投げ込んでしまつたから

「汝れ、曲者」

二發、三發、例の拳銃を林の中へ打ち込んで、馬から飛び下りて探がして見たが、もう七兵衛の姿は見えない。

十八

ここは針ケ別所といふ所の山の奥の奥。谷合の洞穴へ杉の皮を葺き出して、鹿の飲むほどな谷の流れを前にした山中の小舍。

無論、ここまで來て見ねば、小舍も流れも、何處からも見えはしない、ここまで來るのでさへ道といふものはついて居ない。

今、その中で人の話聲がする、いかに大きな聲をしたからとて山の上まで響く筈がない、よし山の上へ響いたとて其處には誰も聞く人はない。

「金藏、旨く行つたな」

ゾッとするほど氣味の惡い鍛冶倉は小舍の中へ敷き込んだ熊の皮の上にあぐらをかいて、煙草を吹かして斯ういふ。

「親方、旨く行きました」

金藏はまだ落ちつかない容子。

「まあ、暫くはここで窮命しろ」

鍛冶倉は、この邊の山の中へ處々こんな小舍をこしらへて置く、そこへは何時でも十日分ほどの食

料を用意して置く。

「親方、斯うなつて見ると俺は一刻も早くお豐をつれて里へ出たい」

「馬鹿な事を言ふな、今連れ出せば罠の中へ首を突つ込むやうなものだ、七日辛抱しろ、さうすれば、安々と拔けられる」

「七日は永いなあ」

「ナニ永いことがあるものか、手鍋さげても奥山住居といふ本文通りよ、結句山ん中が面白可笑しくていいぢやねえか」

鍛冶倉の笑ひぶりは人間並の笑ひぶりではない。生塚の婆樣を男にして擽つて見たやうな笑ひ方をする。金藏はその笑ひ方を方て、今更にゾッとして

「親方、お豐は俺の女房だな」

「ふーん」

鍛冶倉は鼻のさきで笑つた、金藏は眼の色を少し變へた。

「親方、俺はお豐をつれて國越をして見たい、これから直に」

金藏は、今、鍛冶倉の笑ひ方を見てはじめて、お豐をここへ置くことが怖ろしくなつたらしい。

「何だい、何を云ふのだい、金藏」

どうも冥府から響いて人を取つて食ひさうな聲。

「親方、お前さんはここに隠れてお出でなさい、わしは是から、お豐をつれて逃げます、ナニ命がけで逃げますよ」

「やい、金藏、物を言ふには、よく考へて言へよ」

「何だ、親方」

「この野郎、今、俺のすることをよく見て居ろ」

何をするかと思へば鍛冶倉は

「これやい、お豐、お豐坊」

鍛冶倉の背後には、さづきから女が一人泣き伏して居る、その帶際を取つた鍛冶倉。

馬上の武士に鐵砲で脅かされた七兵衛は林へ飛び込んで木の繁みを潜つて北へ逃げた。

山邊郡につづくあたりは全く人家がない、初瀬の裏山へかかつても人家がない。

人家のない事は何でもない、山道を通ることも七兵衛には何の苦もない、山でも林でも、ずんずん横切つて北へ通して見たら奈良街道へ出るだらう、それを南へ直下すれば八木へ着く。

檜の小枝を折つて蜘蛛の巣を打拂ひながら北を指して行つたが、行けども行けども山。

さうして七兵衛は針ケ別所に近い或る山の上に立つて木の下蔭から日足の具合を見て、しばらく方角を考へて居ました。

別に疲れも怖れもしないが、いくら山の中の木の葉の繁みを歩いたからとて、夏の事だから汗も出れば咽喉も乾く。

「水が飲みたいな」

瀧の音が聞えない、渓流の響きが耳に入るでもないけれど山と山との谷間には多少の水はあるものである。木の葉の雫が落ちて、折々通ふ猪鹿の息つぎになる水を、谿底へ行けば何處かに見付ける事が出來るものである。

七兵衛は、路のないこの山を一つ下りて見ようとして

「はて、誰か此の道を通つたものがあるらしいぞ」

下崩の中を見て斯う云ひながら下りて行きました。

七兵衛が下りて行つた時分この谿底では丁度この時、前のやうな有様でありました。

鍛冶倉が、お豐の帶際に手をかけた時だけは金藏は怖ろしさも恐さも忘れてしまつて

「親方、如何しようといふのだ」

前後の思慮もなく鍛冶倉に武者振りつきました。

鍛冶倉はお豐を放つて置いて、そこに投げ出してあつた細引を拾ひ取ると片手に持つて、金藏を膝の下に組み敷く。

「親方、な、なにをするんだい」
金藏とても此の頃は可なりの惡黨になつて居る、上から押へられながら、下から刎ね返さうとする。
「この野郎」
鍛冶倉は繩を口でしごいて、處嫌はず金藏を縛らうとする、縛られまいとして、一生懸命の力は金藏といへども侮るべからず。
「な、何だい親方、そ、そう無茶に人を縛るなんて」
「野郎、手向ひをしやがるな」
鍛冶倉は上から押しつぶさうとのしかかる、金藏は刎ね起きようと悶掻く途端に、手に觸れたのは鍛冶倉の腰にさして居た山刀。それを奪ひ取らうとして遮二無二引き廻すと、鞘が脱け落ちて身だけが金藏の手に殘る。
「アつ」
何處を突いたか、突かれたか、鍛冶倉は繩を持つたなり二三尺飛び退いて、横腹のあたりを押へながら面をしかめる、血がダラダラ二三滴、熊の皮の敷物の上へ落ちる。
「野郎、突いたなー」
「突いたが、如何した」
けれども、鍛冶倉の引つぱつた繩は金藏の首に捲きついて居る。

「アッ、苦しー」
繩をグッと引くとグッと絞れる。
「アッ苦しい！　お豐……お豐さあーん」
血の染みた山刀を振り廻して金藏は眼を白黑、苦しまぎれにお豐の名を呼びながら無茶苦茶に飛びかかつて山刀で鍛冶倉の面を斬る。鍛冶倉は左の側腹を刺されて居る、金藏の首へかけた繩は放さなかつたけれど金藏の刀は避けられず、又しても左の額際を一刀やられた、血が迸つて眼へ入る。
「野郎、また斬つたな」
「アッ、苦しい、お豐……お豐さあーん」
向ふが苦しがれば苦しがるほど此方も苦しい。
「ア痛ッ」
鍛冶倉は眼へ血が入つたので、夢中になつて、金藏の首へかけた繩は離さずに小舍の外へ轉がり出す、金藏は共れに引つぱられて
「ああ苦しい！」
もう息の根が止まりさうである。斷末魔の勇氣でまた斬りつけたのが鍛冶倉の肩先き。
「あッ、また斬りやがつた」
鍛冶倉は外へのり出して、谷水の傍の岩角へ打倒れたが、起き直つてめくら探しに金藏の傍へよる。

「野郎、飛んでもねえ、呑んでかかつたのが此方の落度だ……覺えてろ、よくも俺を斬りやがつたな」

細引をもう一捲き、金藏の首に捲いた時は乳の下あたりを、また深く深く一つ。

「アッ痛つ！」

今度のは一番痛さうであつたが

「アッ苦しい！」

金藏の方も、これが一番苦しさうであつた、この一言で雙方の力がグッタリ盡きた。

お豐は此の騷ぎでもう前から氣絶してゐる、つづいて二人はこんな事をして息が絶えてしまつた。

それで小屋の中が森閑した處へ七兵衞が水を呑みに下りて來たのでした。だから七兵衞は丁度これ等の連中を始末する爲に此處へ下りて來たやうな事になりました。

十九

伊賀の上野の鍵屋の辻といふのは、彼の荒木又右衞門が手並を現はした敵打ちの名所。

その鍵屋の辻に近い吉田屋といふ旅籠屋の一室に、机龍之助は、まだ袴も取らないで柱によりかかつて居る。

襖一重の次の間で

「拙者は、田中新兵衞の仕業に相違ないと思ふ」

「いや、拙者はさう思はぬ、田中はそんな男でない」

田中新兵衞といふ名、京都へ上るときに大津を出て、逢坂山の下の原で、後から不意に呼びかけて自分に果し合ひを申込んだ薩州の浪人がそれだ。

「田中でなくば、あれだけの事はやれぬ、第一、證據がある」

「いやいや、田中なら、あんな事はやらぬ、刀を捨てて逃げるやうな慌てた眞似をする者でない」

「というて、その刀は田中の外に持つべき品でない」

「さあ、それが拙者にも解せぬ、田中は何とも云はず腹を切つた事だから、どうも解らぬわい」

「申開きをせず、腹を切つた事だから、云はずと當人罪に落ちたものぢや」

「さうとも言ひ切れぬ、何かその間に……拙者もよく知つて居るがあの田中といふ男は人を斬つたこと幾人か知れぬ、人を斬ることは朝飯前と心得てゐる、近頃は仕事が無くて腕が鳴る、誰か斬る奴はないか、と人斬りを請負つて歩く程の男ぢや」

「それにしても先方に位がある、威に怖けたかも知れぬ」

「そんな事はない、侍從や少將の位が怖くて暗殺は出來ん」

「役人も、薩州方も、新兵衛の仕業と思ふて居るさうぢや」
「拙者は、やはりさう思はぬ、新兵衛ではない」
これだけ聞いたのでは何だかサッパリわからない。人を斬つたのは田中新兵衛である。いやさうでない、斬つて刀を捨てて來た、當人は默つて切腹した、斬られたのは位のある人——これだけの話の筋を辿れば、彼の主水正正清の長刀を帶して居た新兵衛が、あの刀で誰をか斬つたものだらう、兎に角、あの男は何かやりさうな男であつたが、果して何かやつた。併し切腹とは可哀さうである。龍之助は、もつと詳らかに其の事を聞いて見たいがと思つてゐると、階下から數多くの人の足音。
「やあ、遲なはり申した」
「これは、諸君」
刀の鞘、袴の裾の音が物々しい、聞いて居ると、それは雜多の聲で九州辯もあれば土佐辯もある。この地の藩の人ではない——近頃流行る浪人者である、と龍之助は直に感づきました。
今の次の間の話——田中新兵衛が何者を斬つたかといふのは斯うである。
これより先き、五月の廿一日に、京都、朔平門外、猿ケ辻といふ處で、姉小路少將公知といふ若い公卿さんが斬られた。
少將が其の日の夕方、吉村右京、金輪勇といふ二人の家來をつれ、提灯持を先きに立てて、御所を

出でて猿ケ辻の處まで來た。
御所へ水を入れる處の堰の蔭から、物をも言はず跳り出た三人の男がある。
大業物を手にして面も身體も眞黑に包んで居た。
「驚破！」
吉村右京は、血氣盛んの壯者であつたから、素手でこの曲者に立ち向つたが、肝腎の主人の刀を持つた金輪勇は、肝を潰して暗雲に逃げてしまふ。
兇漢の中の一人、すぐれて長い刀を持つたのが、吉村を他の二人に任せて、姉小路少將を目がけて一文字に斬りかかる。
拔き合はすべき刀は金輪が持つて逃げてしまつた。
「小癪な！」
姉小路少將は持つて居た中啓で受止めたれども、それは何の効もない、横鬢を一太刀なぐられて血は滿面に迸る。
二の太刀は腕を横に充分にやられた、それでも豪氣の少將は屈しなかつた。
「慮外者めが！」
兇漢の手元を押へて、その刀を奪ひ取つてしまつた、その勢ひの烈しさにさすがの刺客が、刀を取り返さうともせず、鞘までも落した儘で一目散に逃げてしまつた。

吉村に向つた二人も、つづいて逃げ去つてしまつた。

姉小路少將は重傷に屈せず、奪つた刀を杖について吉村に介抱されながら邸へ戻つて來たが、玄關に上りかけて

「無念」

と一聲言つたきりで倒れて息が絶えた。

生年僅か廿八歳（或は卅歳）であつたといふ。

この姉小路といふ人は、體質は弱い人であつたけれども、十九位の時に夜中忍び歩いて、關白以下の無氣力の公卿を殺さうといふ計畫を立てたほどの氣象の荒つぽい人でした。東久世伯は、こんな事を云ふ。

「さうさ、我々の仲間では、あれが一番豪かつた、岩倉とどちらであらうか、兎も角も岩倉と匹敵する男であつた、岩倉よりも膽力があつて壓が強い方であつた、併し岩倉と議論が違ふから到底兩立は出來ない、岩倉をやつつけるか、やつつけられるか、どちらかであらうかと云はれましたが、誠に惜しいことをしたものです。」

また其の頃の蔭口に、「三條公は白豆姉小路卿は黑豆」といふ言葉もあつた。

これほどの人が何故に殺されたか、その詮議よりも先づ何者が殺したかと云ふ詮議であつたが其處に殘された刀が物を言ふ。

その刀は緣頭が鐵の腐でそこに「田中新兵衞」と持主の名前が明瞭に刻んであつた。

中身は主水正正清。

拵へは、すべて薩州風、落ちて居た鞘までが薩摩風に違ひないのであつた。

「田中新兵衞」

薩摩の田中新兵衞とは何者？　とたづねるまでもなく、其の時分評判者の斬り手である、人を斬りたくつて斬りたくつて堪らない男である。島田左近を斬つたのも此の男だと云はれて居る。

さうして當時有名な志士の間にも交際がある、現に四五日前も、姉小路少將の家へ來て何か意見を述べて行つた事があるといふ。

「田中を捉まへろ」

田中は平氣で薩州の邸内に寢て居た。呼び出して見ると

「左樣な事は存ぜぬ」

頑として、首を横に振る。

「存ぜぬとは卑怯であらう」

役人は詰る。

「卑怯とは何だ、知らぬ者は知らぬ、存ぜぬは存ぜぬ」

新兵衞は役人をハネ返した。

「證據が物を言ふぞ、隠し立をするな」
役人は突込む。新兵衛は怫然として
「田中新兵衛は人を斬つて刀を捨てて逃げるやうな男ではござらん」
飽くまで手剛いので、役人は下役を呼んで持つて來さしたのが、例の捨てて逃げた刀である。
「新兵衛、この刀に覚えがあるか」
役人は、それ見たかと云はぬばかり。
「拜見」
新兵衛は、其の刀をとつて見た、自分の刀である。
「さあ、どうぢや、その刀は誰れの刀であるか」
新兵衛は凝と見て居たが
「これは拙者の差料に相違ない」
「さうであらう」
役人は勝利である。
ここに至つて、潔き新兵衛の白狀ぶりを期待して居ると、新兵衛は其の刀を取り直すが早いか我が脇腹へ突き立てた。
「や」

並み居る役人も、番卒も一同に仰天した。支へに行く間に、もう新兵衛はキリキリ引き廻して咽喉笛をかき切り美事な切腹を遂げてしまつた。
あまりの事に一同の開いた口がふさがらなかつた。
新兵衛は刀は確に自分の物と承認したけれど、姉小路を殺したのは俺だと白狀しなかつた。
これが爲に疑問はいつまでも殘された。
龍之助の次の間でも問題になつたが、一説には、その前日、新兵衛は三本木あたりの料理屋で飲んで居るうちに何者にか刀を摺りかへられたといふ。武士が差料を摺りかへられた事は話にはならぬ、さすがの田中が其の當座悄げ返つたと云ふ。
兎に角、姉小路を殺したものの何者であるかは今日でもわからない、恐らくは新兵衛ではあるまいといふ事。

龍之助のゐる次の間へ多くの人が入つて來たので、田中新兵衛の噂は立ち消えになつたが
「ゑ中、あの襖を外して呉れ」
彼等の集まつたのは龍之助の隣りの十疊の間を二つ打ちぬいたので、龍之助のはそれにつづいた六疊一間であつたが、今向ふでその襖を外せと云つたのは集まつた浪人の中の重立つた者らしい。
「あのお隣りにはお客様がおいでददございまする」

「ナニ隣りに客がゐる、その客といふのは何者だ」
「はい、矢張りお武家様でございます」
「ふむ、武家か、幾人居る」
「お一人でございます」
「一人――然らば何とか都合をしてそのお客を他の座敷へやつてくれ」
「はい……」
「我々共が、この三間を通して借り受ける、隣りのお客に體よく申して立ち退かして呉れ」
「お話しを致して見ませう」
女中は心なくお受けをして引き下がつた客子。浪人連は
「熱かつたな」
「中々熱い」
「風呂へ入れ」
「今、酒井と那須が入つて居る」
「さうか、氷を食へ」
氷を嚙る音ガリガリ。
「今聞けば、このつい先きが鍛屋の辻というて荒木又右衛門が武勇を現はした處ぢやさうな」

「うむうむ、それを今知つたか」
「面白い、荒木の卅六番斬なんといふのは、よく張扇で聞くが、いつも壯快ぢや、荒木の前に荒木なく、荒木の後に荒木なしと云つてな」
「山陽の作つた詩に、こんなのがある、一つ歌つて聞かさうか」
「謹聽」
詩を吟ずることを得意にする者が興に乘じて歌はうといふ、一同はそれを謹聽するものらしい。

伊賀城頭西閭門
復讎跡あり恍として血痕
仇人、馬に騎り魚貫して過ぐ
挺刀一呼、渠が魂を奪ふ
姉夫慷慨にして兼て義に從ふ
春令原寒うして同じく寃を雪ぐ
一水西に渡れば是れ崎原
當時投宿の館は尙ほ存す
吾れ來つて燈を挑げて往昔を思ふ
想ひ見る淬刄曉暾を候ふ

嗟哉士風猶薄夫をして敦ならしむ
寛永の俗、今誰と論ぜん

詩を吟じ終つて暫らくの間靜かである。それにしても、もう立退き命令が來さうなものぢやと、隣室の龍之助は心待ちにもなるが、なかなか來ない。

一寸、隔ての襖を明けた者があつたやうだが、明けて直ぐに立て切り

「まだ居るわ、隣りに男が一人居る」

明けた男は、やや小聲であつたけれど龍之助にはよく聞える。

「まだ居るか、女中奴何とも云はん」

ハタハタと手が鳴る。

「お召しになりましたか」

忙はしげにやつて來た女。

「これこれ女、ナゼ最前申しつけた通り、隣室へ申入れん」

「はい、どうも相濟みませぬ、つい忙はしいものでございましたから」

「早速申入れろ」

「はい、只今……」

女中は、すぐに來るかと思ふと、すぐに來ないで一旦下の座敷へ行つてしまつたらしい。龍之助は

袴でも取らうかと思つてゐる處へ

「御免遊ばせ」

例の女中が入つて來て

「旦那樣、お風呂をお召しになりましては」

「まだ入りたくない」

「あの旦那樣、お隣室が混み合ひまして、誠にお喧しうございませう、あの、少し手狹ではございますが、あちらの四疊半が明いて居りますから、御案内申しませうか」

「此處で宜しい」

此室で宜しいとキツパリ云はれた女中は二の句が次げなかつたが、やつと

「それでも、ここは、あのお隣室のお客樣が夜更けまでお話になるとお困りでせうから」

「いいや、賑かで却てよい」

謬もない言葉である。

「それでは、どうも……」

切り出しが拙かつたので、女中はヘトヘトになつて言葉を濁して出てしまひました。

しばらく經つと、また隔ての襖が二寸ほど開いて、凝と此方を見たのは眼の大きい面の色の赭黑い

總髮の男であつたが、今度は篤と龍之助の面を見定めてから、また襖を締め切り

「まだ居るぞ」
「まだ居る？」
また手がハタハタと烈しく鳴る。
「お召しになりましたのは、こちら様で……」
恐る恐るやつて來たのは以前の女中でなくて番頭。
「貴様は何だ」
「へえ、番頭でございます」
「最前から、この隣室を開けて貰ひ申すやうに再三申しつけたところ、何で其のやうに取計らはぬ」
「恐れ入りましてございます、手前からもう一應」
番頭は非常に恐縮して、すぐ其の足で龍之助の處へやつて來ました。
「御免を願ひまする——」
「何用ぢや」
「どうも、混雜致しまして、行き屆き兼ねまする、時にお客様——甚だ申兼ねた儀でございますが、この部屋は、ちと喧しうございますので、どうか、あちらへお引移りを願ひたいものでございまして……」
「いや、ここで宜しい、却て賑かでよい」

「へえ……」
番頭は思はず頭に手を置いた。
「それに致しましても、隣室の衆が、お氣の荒いお方の様に見えますから、もし間違ひでもありましては……」
「いや、心配する事はない」
「でも、もしや、お間違ひが出來ますると、あなた様のみならず手前共まで迷惑致しますから、どうぞお引移りを」
「こちらが默つて控へて居れば間違ひの起る筋も無からう、心配するな」
「ではござりませうが……」
「ここで宜しいと申すに」
番頭は困じ果てた。この時、隔ての襖を荒つぽく引き開けて
「御免」
案内もなく入り込んで來たのは、髻を高く結び上げて、小倉の袴を穿いた逞しい浪士であります。
手には印籠鞘の長い刀を控へて
「番頭退け——」
龍之助の前へ撞然と坐つて

「初めて御意得申す」
「何か用事でござるか」
「さきほどから、再三、宿の人を以て申入れる通り、我々は御覽の通りの多勢ぢや、お見受け申せば、貴殿はお一人、どうか、この席を多勢の我々に讓つて戴きたい」
「その儀ならばお斷り申す」
「ナニ、斷る」
印籠鞘の武士は眼に角を立てて
「女中や番頭共のかけ合ひとは事變り、武士が頼みの一言ぢや、氣をつけて挨拶を致せ」
龍之助は武士の方には取り合はないで、番頭の方を見て
「番頭殿、この氣狂ひを、あつちへ連れて行つてくれ」
印籠鞘は激昂して
「氣狂ひとは何だ……氣狂ひとは聞き捨てならん」
「まあまあ、そこの處を一つ——どうか、さういふわけでございますから旦那樣、多勢に無勢でどうもはや、どうかお引うつりを願ひたいもので……」
番頭は天手古舞をはじめる。
「汝れは、間諜ぢや、幕府の犬であらうな」

印籠鞘の浪士は龍之助に詰め寄せる。
「やれ、やれ！　やつつけろ！」
今開け放して置いた襖から七ツ八ツの、何れも穏かならぬ面が最前から現れて、この無作法な浪士の後援をつとめて居たのが今一齊に彌次り出した。
何處へ行つても、今頃は、こんな血の氣の多いのに打突かる事が珍らしくない。いや、龍之助は、これよりもつともつと生命知らずの新選組や、諸國の浪士の間に白刃の林を潜つて來た身だ。
白い眼で、じつと見て、左手で植田丹後守から餞別に貰つた月山の一刀を引寄せる。
龍之助は、この刀を持つてから、まだ人を斬つた事はないのである、さりとは餘り物ずきな、この連中を相手に喧嘩を買つて見る氣か知らん。
浪士等は、一喝の下に嚇して呉れようと威勢を見せたが、案外、手答へがなく、シンネリとして、蒼白い面に憤つて沸くべき血の色さへも見えず、賣りかけられた喧嘩なら、いくらでも買ひ込む氣象を見せて、刀を引き寄せた龍之助の擧動を見て、且つは呆れ且つは怒つたのであります。
「汝れは、生命といふものが惜しくないか！」
印籠鞘の浪士は居合腰になつて刀を捻つたのである。
「生命なんぞは惜しくない——」
彼は月山の新刀を手にとると、此の時むらむらとして無暗に人を斬りたくなつた。

「いけません、いけません、どうかまあ、あなた様もお御まり下さい、こなた様もお控へ下さい、手前共で迷惑を致します、外のお客様にも御迷惑になります、どうか、お抜きなさる事は、御用捨を願ひます、御用捨を願ひます」

番頭は必死になつて、支へて見たけれども、元より共の力には及ばない。

「宿を騒がしても氣の毒ぢや、どうだ諸君、これより程遠からぬ處に鍵屋の辻といふのがある、鍵屋の辻へ行かう、音に聞く荒木又右衛門が武勇を現はした處ぢや、そこで一番、火の出る斬合をやつて、伊賀越の供養をして見たいなあ」

彼の印籠鞘の武士は衆を顧みて腕をまくり立てる。

「結構、事の血祭りに幕府の間諜を斬れ、伊賀の上野とは幸先きがよい、やい、幕府の間諜、表へ出ろ、荒木が卅六人斬りの名所を見せてやる」

彼等は龍之助を、その鍵屋の辻へ引ぱり出して斬つてしまはうと考へたらしい。まことに無意味な行きがかりに過ぎないけれども龍之助はそれを拒むべき人ではなかつた。

この時、向ふの室の床柱を背負つて、さきから少しも動かすに茫然と事の成行を見てゐた小兵にして精悍、しかも左の眼のつぶれた男が

「各々方、詰らん事をなさるな」

小兵にして精悍な左の眼のつぶれた右の浪士は、膝の上に繪圖をひろげて眺めて居ながら、最前から

らの騒ぎは、他を吹く風のやうにして居たが、此の時はじめて頭を振り向けて斯う云うと

「餘りといへば無禮な奴」

「無禮は、こちらの事」

「先生、これは間諜でござる、幕府の犬に違ひござらぬ」

「何にしても、各々方より少し強いやうぢや」

「宿を騒がすも氣の毒故、鍵屋の辻へ引ぱり出して斬つてしまはうと存じます」

「あべこべに、斬られてしまふぞ」

「何を、多寡の知れたる間諜」

「フム、此方で模様を見て居ると、先方の方が餘程強い」

「左様な事はござりません、先生にも似合はん事を仰有る」

「強い、強い、先方が強い、この分で、鍵屋の辻へ行かうものなら瞬く間に、各々方が撫で斬りになる」

「これは先生のお言葉とは覺えん、さほどに我々を見縊り給ふか」

「兎に角引き上げ給へ、こちらの出やうが悪い、かけ合ひが禮儀でない」

小兵にして精悍な、左の眼のつぶれた浪士と他の浪士共との問答はこんな風であります。味方をたしなめて敵の方を賞めて居る。龍之助はその言葉つきの妙に落着いたのを聞いて、何者であるかを訝

つて居たが、亂暴な浪士共の氣勢は、すつかり折れてしまつた。

「さて、明日は大和へ入つて、萩原へ泊る、それから宇陀の松山へ出ようか、初瀬へかからうか」

左の眼のつぶれた浪士は、また地圖を擴げて

「萩原から松山まで二里一町——松山から上市までが四里と十三町——これを初瀬の方へ廻ると萩原から一里十七町、三輪、櫻井八木へ出て南へ下る」

里數を、あれからこれと數へ立てられて一座の浪士は煙に捲かれる。

「さあ、各々方、ここへ來て、地圖を御覽なされ、那須氏には、よう此の道を御存知の筈ぢや、十津川入りには、何れの道をとつたがよいか」

「左樣、十津川入りには……」

一番先へ喧嘩に出たのが疊の上に擴げた繪圖面の方へ首を持つて來て

「初瀬から八木へかかるが、道は宜うどざるが、近頃は……」

「松山へ出た方が近うどざるか」

「左樣——」

どうやら、この繪圖一枚で喧嘩が納まりさうである。

この左の眼のつぶれた人は、十津川天誅組の巨魁松本奎堂であつた事が後に知れる。

二十

お豐は、我を忘れて欄干の上から下の往來を見おろした時に、藥屋の前を總勢十人ほどの旅の武士が隊を成して通り過ぐるのを認めました。

「ああ、あの方は確かに……」

笠を深く被つては居たけれど、お豐は其の旅の武士の一隊の中に龍之助のあることを確かに見とめたのであります。

お豐は周章て梯子段を下り盡したけれども、彼の十人ほどの武士の一隊のうちの一人も店へ入つて來た人影はありませんでした。店先に打ち水の空手桶をさげてぼんやり立つてゐるのは女中一人。

「お光さん、今こちらへ、お客樣がお見えになりましたでせう」

「いいえ」

「それでは、ここを十人ばかりのお武家さまがお通りになつたでせう」

「あ、お通りになりました」

「そして……どちらへお越しになりました」

「鳥居のわきを南の方へお出でになりました」

「まあ、さうでしたか、それでは違つたか知ら」
お豐はそれから若しやと植田丹後守の邸の前まで行つて見ました。
併し、邸はいつもの通り穏かなもので、下男の久助が打ち水をして居る。
「久助さん、久助さん」
「おや、お豐さんか」
「あの、只今お邸へお客樣がありましたか」
「いや、さつき郡山からのお使ひが一人見えたつきり、正午前の中は武者修業が三人ほどお出でになりましたが直ぐお歸りでした」
「ああ、さうでございましたか、あの、たつた今十人ほどのお武家が、こちらへお通りになりましたから若しや、お邸のお客樣ではないかと思ひまして」
「いや、そんなお客樣はお出でがない、十人はさて措き一人もお見えになりませぬ」
「さうでございましたか」
お豐はここにも言はん方なき失望でありました。

川上へ雨が降つたので、初瀬川の水嵩は増して居ました。河原の中程にあつた地藏堂は引き上げられて、やや離れた竹藪と假橋の間に置かれてあつたがその藪へも水はひたひたと寄せてゐるのであり

ました。
お豐は假橋から向ふを見渡したけれど、櫻井の町の燈火が明るく見え、多武峰が黑ずんで居る外には人の影とては見えないのであります。
うす月は三輪山の上を高く登つて居るのに、河原は何となく暗い——涼しい風は颯と吹いて來た、河波を逐うて、螢が淋しいもののやうにゆらりゆらりと行く。
「ああ、わたしとした事が、何でこんな處まで來たのでせう」
幻影を追うて夢の里を歩み、何かに引かれてここまで來たが、氣がついて見ると、お豐は自分ながら何でこんな處へ來たのか、わかりませんでした。
此處へ來ると氣が拔けて、お豐は行くのもいや、歸るのもいやになりました。
地藏堂の傍の蛇籠へ腰を掛けてしまひました。さうしてぼんやりと夜の河原をながめてゐました。
頭は色々の事を考へて一ぱいになつてゐました。
「お豐さん」
地藏堂のうしろから不意に人が出て來たので我に歸りました。
「お豐さん、わしは金藏ぢや、驚きなさるな」
「まあ、金藏さん——」
迷うて來た——金藏は、たうとう幽靈になつて自分にとりついて來た。驚くなと云つてもこれは驚

かずにはねられない、お豐は身の毛がよだつて、足がすくんでしまひました。

「お豐さん、驚いちやいけません、金藏です、金藏が斯うして生き返つて來たのですよ」

藪蔭から出て來た金藏は、絲楯を脊に、小さな箱を筋かひに肩へかけて藥賣の旅商人體に作つてゐました。

「さあ、そんなに驚いちやいけませんといふに、お化ぢやありませんよ、金藏は生き返つて來たのですよ、お前さんといふものが思ひ切れないで生で返つて來たのですよ」

ああ、生き返つて來たのに違ひない、幽靈でもお化でも何でもなく生のままで金藏はここに立つて居る。

「金藏さん、お前は助かりましたか」

お豐は逃げることも出來ないので、やつと斯う云つて見ますと

「ああ、助かりました、あの時、針ケ別所の山の中で、鍛冶倉の奴に苛い目に遭つて、首へ細引を捲きつけられましたがな、わしはまた、鍛冶倉を山刀で無暗に突き立てて突き殺しましたよ、わしも一旦は縊り殺されたのですがね、しばらくすると息を吹き返しましたよ、誰か知らん、首に捲きつけた細引を釋いて呉れた人があつたのでね、やれ嬉しやと小舍へ這ひ込んで見ると、お豐さん、お前の姿は見えないや……」

金藏は中腰になつて、お豐の前で、あの時の物語をはじめます。

「見れば鍛冶倉の奴は傍で死んで居るし、それでは、お豐さん、お前が逃げる時に、わしの首から細引を釋いて行つてくれたのかと思つた時はわしは嬉しかつたよ」

「あの、それは……」

「それだけでも俺はお前さんの親切が嬉しくつて嬉しくつて、あれからわしは谷を這ひ廻つてやつと里へ出て、惣太が家へ、二日ばかりかくまつて貰つて、それから身體もすつかり快くなつたからね、わしはお前、こんな風に藥賣りの眞似をしてね……どこへ行くものか、この界隈を夕方になるとはブラついて、お前の容子を見て廻つて居たのだよ、どうか、お前に一眼あひたいと思つてね」

「まあ……」

「お前さんが、旅の人に助けられた事も、藥屋へ送り屆けられた事も、藥屋で養生をして元の身體になつた事も、直ぐわかりましたよ、だからわしはお前さんの家へ忍び込んで、お前さんを奪ひ出さうと斯う思つたがね、荒つぽい事をする前に一應お前さんに直接にあつて、わしの心の丈けを、ようく聞いて貰つた上の事にしようと、毎日々々、お前さんをつけ覘つて居たが、お前さんは丸きり外出をなさらぬ、いよいよ今晩こそと、思ひ込んだ矢先き、お前さんは大急ぎで二階から下りて、植田のお陣屋の方へ行きましたね、占めた、とわしはあの時からお前さんのあとをつき通しで、ここまで來たのですよ」

ああ、何處まで執念深い男であらう、とお豐は身慄ひを止める事が出來ません。

「金藏さん、お前の心は有難いけれども、何卒勘忍して下さい」
「お豐さん、心配しなくてもいいよ、わしはここでは、手荒い事はしませんよ、ただ今晩は、お前さんに、わしの心の丈けを聞いてもらひたいのだよ」
「金藏さん、お互に、もうそんな事をよしませう、わたしは歸ります」
「歸しません、一通り、わしのいふ事を聞いてくれなければ、ここは動かせないのですよ、お豐さん……お前さんの爲に、わしがドレ程苦勞したか、お前さんは知るまいねえ」
金藏はオロオロ聲です、金藏は生え抜きの惡徒ではなく、親に甘やかされた放蕩息子の上りですから、本氣になつて物を言ふ時には、お坊ちやんらしいところがないではない。
「わしばかりではなく、わしの親達まで、お前さんの爲に、飛んだ苦勞をして居るのだよ、あの時に、お豐さんが、私の處へ來て呉れれば、わしも人殺しなんぞをしなくてもよかつたのだよ、ねえ、お豐さん」
「……」
「いいかえ、わしは、お豐さん、兇狀持ちなのだよ、今にも役人につかまれば首を斬られてしまふのだよ、お前の叔父さんを鐵砲で擊つたのもわしだよ、鍛冶倉を殺したのもわしだよ、ソンなに惡い事をするつもりは無かつたけれども、お前さんといふ者に迷ひ込んで、ソンな惡いことをしてしまつたのだよ、お前さんといふ人が三輪へ來なければ、わしはこれほどまでに惡い人にはならなかつた

のだよ」
「ほんとに濟みません、わたしが來なければ、宜かつたのでございます……」
「あ、お豐さん、よく言つて呉れた、わしはお前さんに濟みませんと言はれたのが嬉しい……」
金藏は、どうしたのか面を伏せて沈んで涙を拭いて居るらしいのです。お豐は、どうも可哀さうになつて
「金藏さん、わたしが三輪へ來たのが惡いのですから、勘忍して下さい、さうしてお前さん、わたしを思ひ切つて、早く遠い國へ立ち退いて下さい、女ひでりの世ではあるまいし、わたしのやうな者をそんなに思つて下さらなくても、世間には隨分立派なお方があるのですから、あなたもお若いに、男の器量ではありませんか、どうか、わたしを思ひきつてお役人に見つからないうちに遠くの方へ逃げて下さい」
「あ……ありがたい……お豐さん……」
金藏は泣いて居る。
「お前さんに、さういはれると、わしは思ひ切りたいが……お豐さん、そんなに言はれれば言はれるほど、思ひ切れなくなつてしまふ」
「ああ、どうしませう」
「お豐さん、お前を思ひ切る位なら、わしは死んでしまつた方がよい」

「そんな事を云ふものではありません」
「お前さんが、わたしの言ふ事を聞いて呉れなければ、わしは死にます、自分で死ぬか、役人につかまるか、どの道、わしは死んでしまふのですよ」
「それですから、早く逃げて下さい、お金が入用なれば、少し位、どうでもして上げますから」
「お金はあるよ、家を逃げ出す時に持つて居たのが、まだこの箱の中にソックリあるから、逃げようと思へば、旅費には困らないのだよ」
「そんなら、金藏さん、ずつと遠く江戸の方へでも、お逃げなさい、さうして居るうちに縁があれば、またお眼にかかりませうから——わたしも實は江戸の方へ參らうかと思つて居るところでございますよ」
「ナニ、お豐さん、お前が江戸へ行く、それはほんとかい、ほんとならば一緒に行かう、是非一緒に逃げませう」
金藏は涙の面をヤツト擡げる。お豐は言ひ過ぎたのを氣がついて
「けれども、わたしのは、いつの事だか知れません、お前さんのは急場ですから」
「そんな事を言つても駄目、わしに一人で江戸へ行けなんと云つてもそれは駄目だよ」
「そんな事を言はずに、お逃げなさい、あの景のよい東海道を下つて、公方様のお膝下の賑かさを御覽なされば、わたしの事などは思ひ出す暇はありやしませんよ」

「駄目だ駄目だ、公方様のお膝下が、いくら賑かでも、お豐さんといふ人は二人と居やしないからねえ」
「どうも困りました」
お豐は、もう何と言ひ賺すことも出來なくなつてしまつたものです。
「お豐さん、わしは斯う思つて居るのだよ、まあ聞いて下さい、わたしの爲にわたしの親達までが、この土地に居られなくなつて、立ち退いた事は、お前さんも知つて居るでせう」
「はい……」
「その、わしの親達はね、母親の里なのですよ、紀州の山奥に龍神といふ温泉場があるのですよ、そこでね今温泉宿をやつて居るのですよ」
「はい……」
「こちらの身上を、すつかり片づけて、紀州へ隱れて、かなりの温泉宿をやつて居るのですよ、どうです、お豐さん、そこへわたしと一緒に行きませんか」
「紀州へ？」
「エエ、わたしもね、お前さんの叔父さんを鐵砲で撃つたけれどもそれは些とも惡氣があつてやつたわけではなし、お前さんを欲しいばかりでした事なのだよ、仕合せに傷も今では、すつかり直つたさうだし、鍛冶倉の野郎は殺した方が人助けなんですからね、國越をしてしまへば、もうそんなに役

人に睨まれることはないのですよ、紀州の龍神へ行つて溫泉宿をやり、わしが亭主になつてお前がお内儀さんになつて、所帶を持たうではないか、ね、さうして下さい、お豐さん」

金藏は、ねんごろに、首をさげ手をつかんばかりにしてお豐の前に願うてゐる。

「けれどもねえ、金藏さん、お前のお心はほんたうに有難いと思ふけれども……」

「ウム、やつぱり可けないのかいお豐さん、どうしても、お前はわしの言ふ事を汲みわけてくれないのかい」

「お前さんの心は、よくわかつて居るけれども……」

「心だけでは駄目だよ、お豐さんが、わしの言ふ通りになつてくれなければ、わしはドノ道無い命だからね……」

「金藏さん、どうか短氣な事をしないで辛抱して下さいよ、そのうちにはねえ……」

「その中にはといつて、お前、その中にわしが役人につかまつたらどうします、どうか、お前さん、わしと一緒に逃げて下さいよう」

「そんな事を仰有やつては困ります」

「そんなら、お豐さん、どの道捨てる命だから、わしは死ぬ、死ぬけれども一人では死なないよ、ああ、一人では死ねないのだよ、お豐さん」

「どうも困りました」

「困ることはありやしない、お前さんが、わしの心を汲みわけてさへ呉れたなら、わしの命も助かる——お豐さん、わしは、お前のからだに指一本だつて指しやしないよ、ねえ、お豐さん、いいかえ」

「金藏さん、そんな事は出來ません」

「出來ない」

「エエ、少し都合があつて、お前さんと一緒に逃げる事は出來ません」

「ほんとに出來ない——出來ない——そんなら」

是に至つて金藏は懷中から短刀を一本取り出します。

「お豐さん、では、お前を殺して死ぬよ、無理心中だよ」

金藏は惡黨に返つた。

「金藏さん、殺して下さい」

意外にもお豐は驚かなかつた。

「ここで、お前に殺されたとて、誰も、わたしが、金藏さんと心中したと思ふものはありますまい、どうせ、わたしも罪の盡きない身體ですから、お前さんに殺されて上げませう、さあ殺して下さい」

「ナニ、殺せ……よし殺すとも」

金藏は短刀の鞘を拂つて、お豐の胸元を左の手で掴む、お豐は爭はず、斯うなつて見ると無茶な金藏にも刃が下せない。

「お豐さん、殺される命なら、ナゼ生きた身體をわしに呉れないのだい……同じことぢやないか。生きて居た方が割がいいぢやないか」

「金藏さん、もうそんな事を言はないで、早く殺して下さい」

「殺す、殺すには殺すが……お豐さん、もう一ぺん考へて見てお呉れ」

「わたしは死んだ方が宜うございます」

「死んだ方がいい……ああ、なぜ、お前はそんなにわからねえのだ、よし殺す……さうしてお豐さん、わしは、ここでお前を殺して置いてね、藥屋の家へ火を放けるよ、それから陣屋の植田へも火をつけるよ、その上に三輪の神杉へも鐵砲の煙硝を振りまいて火をつけるよ、さうして藥屋の者も丹後守の奴めも、殺せるだけ殺して、わしはその火の中で燒け死ぬのだ、いいかい——」

「まあ、金藏さん——待つて下さい、待つて下さい、金藏さん」

お豐は今となつて、金藏の手を抑へて

「金藏さん、お前は、わたしの命をとつた丈では勘忍が出來ないかい、そんな大それた事をホントになさる氣かい」

「するとも——あの藥屋の源太郎奴は、わしの親から、お前さんを貰ひたいと頼んだのに、天から謝絶つてしまやがつた、あの丹後守はお前を隱して、わしに會はせなかつた、この二人は深い怨みだから、わしは、ここで、お前を殺して置いてその怨みを晴らすのだ、刷毛ついでにあの三輪の杉へ火をかけて、丸燒きにして呉れる」

「ああ、どうしませう、金藏さん、それだけはよして下さい、わたしを此處で存分に斬るとも突くともしてそれで他の怨みは帳消しにして下さい」

「さうは行きませんよ、わしの親達が、先祖からのこの三輪の土地に居られなくなつたのは誰のお蔭だい——わしはもう、あの三輪といふ處を燒き亡ぼしてしまつて、さうして其の火の中で燒け死ぬのだよ」

「金藏さん、なぜ、お前はそんな怖ろしい事をします」

「そんな怖ろしい心にしたのは、誰だい、お豐さん、お前ではないか」

「金藏さん、そんな無理な事を言はないで……」

「何が無理だい、お前が人のお神さんならば、わしの言ふ事が無理かも知れないが、お前は定まる夫のない身ではないか、それにわしが思ひついたのが無理かい」

「ああ、わたしは、どうして宜いかわからない——」

「わからない事は無いのだよ、わたしと一緒に、お前が逃げて呉れさへすれば、わしは全く心を入れかへてお前が商賣をしろと言へば商賣もする、江戸へ行きたいと云へば江戸へ行く、どうしてお前のからだに、こんな怖ろしい双物なんぞを當ててよいものか……お前を大切の大切のものにして可愛がるのだよ、藥屋や、お陣屋へ火を放けるなんぞ、そんな大それた事を、誰が好きこのんでやるもの

かな……お豐さん、もう一べん考へ直して下さい　わしは、お前が思ひ切れない――」

金藏はお豐の胸倉をはなして、其の手で瀧のやうに落ちる自分の涙を拭きました。無體の戀慕ながら眞劍である、怖ろしさの極みであるけれども、其の心根を察してやれば不憫もある。

「金藏さん、わたしには、わからない、どうして宜いのかわかりません」

「お豐さん　そこで靜かに考へて下さい、わしも考へるから」

お豐の見た眼に誤りはなく、机龍之助は彼の伊賀の上野から、松本奎堂等の浪士と一緒になつてまた大和國へ逆戻りをして來たものです。

藥屋の二階から其の姿を認めて、お豐がここまで足を引かされた事も、丸きり夢ではありませんでした。

然らば、龍之助は今何處に居るか――何でもない事、川を隔てた直ぐ向ふの櫻井の町へ、一行の浪士と共に宿をとつてゐるのでした。

これ等、浪士の一行が、この後、中山忠光を奉じて旗上げをした「天誅組」の卵であることは申すまでもありません。

「天誅組」は天忠組である、天朝へ忠義を盡す義士達の寄合である、さうして、机龍之助は、彼の「新徵組」から新選組にまで、腕を貸した男である。新徵組や新選組は幕府の味方である、天忠の志士とは根本から目的が違ふのであります。

では、机龍之助こそ、松本奎堂あたりに說かれて、改めて天朝へ忠義の心を起したか、德川へ盡す志を變じたか。

そんな筈はない、龍之助が新徵組に腕を貸したのとても、何も德川に恩顧があるわけでもなければ、幕府を倒してはならないといふ義憤があるわけではないので、ただ行きがかり上さうなつたまでであります。

されば、「天誅組」の仲間になつたとても、事改めてギリギリ齒を嚙んで尊王攘夷を絕叫するなんといふ勢ひになれる筈がないのです。ただあの喧嘩の一幕を納めた松本奎堂の意氣が面白い。

「どうぢや、吉野の方へ遊びに行かんか」

「行つてもよい」

これで相談が纏まつて、彼は一行の中に加はつて、又も大和國へ逆戻りをして來たものです。

けれども、龍之助の大和國へ逆戻りをして來た緣故がただ、これだけであると思ふのも、あまりに淡泊であります。

宿について、風呂を上り夕飯も濟んで例の浪士共は、慷慨悲憤の口調で、國事の日に非なるを論じ合つて居たが、龍之助は其れに拘はらず外へ出ました。

彼は深い編笠の紐を結びながら櫻井の宿を出て初瀨河原の方へ行く、天はうすら曇つて月は朧のや

うだ――彼の假橋を渡つて微行ゆく机龍之助は何處へ行くつもりであるか。

龍之助は三輪へ行くつもりで、初瀬川の橋を渡つて、丁度彼の地藏堂の竹藪のところまで來かかりました、天にはやはり月がある、地には露がある、螢は露をたづねて飛ぶ、人は情に引かれて忍ぶ。

龍之助は、今、河原の地藏堂の處まで來た。さうして月影のさすところの行手に二つの人影を認めた。

男と女、どちらも若い。

そして、どちらも泣いて居るやうだ、日の光のさす處では會へない連中が月影に忍んで泣き明かすのである、無下に驚かすにも當るまい、さりとて、そこを通らず露の竹藪を横ぎるのは考へものだ。

「金藏さん……」

泣き伏して居たやうな女が面を上げる、ああ、その聲は……龍之助は、立つてしまつた、幸ひそこに地藏堂の蔭がある。

「お豐さん」

若い男の聲、これも聞いたことのあるやうな聲。

「金藏さん……わたしは覺悟をしました」

女は覺悟をしましたといふ、覺悟とは何をいふ。

龍之助は、この女あるが故に、大和に舞ひ戻つたのではないか。若い男は

「お豐さん、覺悟とは何だい」

「金藏さん、わたしは、もう諦めてしまひました、わたしの身は、お前さんに任せてしまひます」

「ナニ、わしに任せる……それは眞實か、お前は、わしと一緒に逃げて呉れるか……」

歡ばしさに若い男の萎れた五體は刎ね起きて、女の肩へ手をかけて

「よく言つて、呉れた、それは嘘ではあるまいな」

「とても、斯うした身體でございます、その代り金藏さん、決して外の人を怨んで下さるな……」

「さう定まれば……お前さんさへ、その氣なら何で人を怨まう、ああ嬉しい、わしの願ひが叶つた……こんな嬉しいことはない、お豐さん、これから直ぐに紀州へ逃げませう、あのさつき話した通り、紀州の龍神といふところへ逃げませう、そこにはわしの親達が溫泉宿をやつて居る……ああ嬉しい」

龍之助のここへ來かかる事は遲かつた。

最前からの始末を、ようく聞いて居たならば、お豐の覺悟をしたといふわけも、金藏の嬉しがるわけも、すつかりわかるのであるが、これだけ聞いたのでは聞かない方がよかつた。

何だ！　輕薄な女。

もう自分の事は、すつかり忘れてしまつて、ここでは別の若い男と出會つて、身を任せる――言句は絶え果てた……男一匹がこの女の爲めに散々に嬲弄されて居たのだ、人を斬ることの平氣な龍之助

は順序として、ここで、この二人を並べて置いて斬るであらう――けれども龍之助は刀へは手もかけないし齒噛みをして居る容子もない。

昔は、この女がまた別の男と心中の相談をして遺書を書いて居るところを、よく知り拔いて居ながら、助けようともしなかつた、今は同じ女が仇し男に身を任せると誓ひを立てたのを聞いて、やはり其の儘で置く龍之助の氣が知れない。

「お豐さん、お前は一旦死んだ體、わしも一旦地獄を見て來た體、生れ更り同志が斯うして一緒になるのも三輪の神樣の御引合せだね」

金藏は斯う云ひながら、お豐の手をとつて、その着物の塵を拂つてやつたり、帶の結び目を直してやつたり、お豐はそれを金藏のする通りにさせて、さうして二人は靜かに竹藪の彼方へ並んで行く。

龍之助は、地藏堂の蔭に立つたなりで、追ひかけようとも何ともしませんでした。

中里介山居士著

大菩薩峠

大乘と大衆とはその字相似たれども其の義は遠し。大乘とは六道四生の一切を乗せて此岸より彼岸に渡す大誓願を意味し、所謂大衆とは多數を導いて、せいよ〳〵我慾凡俗の巷に墮せしめんとする。わが「大菩薩峠」は既に八千頁、五百萬言、人文あつて以來最大カンバスを用ひ、なほ有限無限を超越してゐる。之を讀むことは人類の義務であつて、之を讀まざるものは果報を捨つるに同じ。これ唯一無二の大乘文學に婆婆即寂光土の福音也。

第一書房發行「戰時體制版」は量を多くし價を廉にして廣く發賣奉仕する方々の爲には既刊十五冊、隣人之友社に於て取揃え發行す、その目次は左の如し、

「大菩薩峠」目次

第一冊〈甲源一刀流の巻・鈴鹿山の巻・壬生と島原の巻・三輪神杉の巻・龍神の巻・間の山の巻〉
第二冊〈東海道の巻・白根山の巻・女子と小人の巻・市中騒動の巻・駒井能登守の巻・伯耆安綱の巻〉
第三冊〈如法闇夜の巻・お銀樣の巻・慢心和尚の巻・道庵と鯉八の巻〉
第四冊〈黒業白業の巻・安房の國の巻・小名路の巻・禹門三級の巻〉
第五冊〈無明の巻（上）・他生の巻・白骨の巻〉
第六冊〈他生の巻（下）・流轉の巻・みちりやの巻〉
第七冊〈めいろの巻・鈴慕の巻・Ocean の巻〉
第八冊 年魚市の巻
第九冊 畜生谷の巻・勿來の巻
第十冊 辨信の巻・大菩薩峠梗概（第一冊より第九冊まで）
第十一冊 不破の關の巻
第十二冊 白雲の巻・膽吹の巻
第十三冊 新月の巻
第十四冊 恐山の巻
第十五冊 農奴の巻

以上各冊定價 金壹圓五拾錢宛 送料各冊拾貳錢

東京府西多摩郡 東多摩村四七 隣人社 振替東京七五三三一番

東京市牛込區矢來町五五 隣人之友社

大菩薩峠

第一冊

滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の外地定價八十五錢

昭和十四年[illegible]月[illegible]日印刷
昭和十四年[illegible]月[illegible]日（戰時體制版）初刷三萬部發行

定價七十八錢

著作者 東京市麹町區三番町一 中里介山

刊行者 東京市麹町區三番町一 長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一 第一書房
振替東京六四二二三
電話九段一四一五 三三四四

東京市小石川區久堅町一〇八
共同印刷株式會社
印刷者 君島藤

戰時體制版の宣言

第一書房　長谷川巳之吉

此度計らずも杉浦重剛先生の『選集倫理御進講草案』を戰時體制版として刊行するの光榮を擔ふに當り、いささか戰時體制版發行の趣旨・抱負を宣言いたします。

凡そ出版の事業たる一國文化のバロメタアを成すは言ふまでもありませんが、特に現下の如き戰時下の非常時局に當つては、その責務益々重大なるを自覺し、茲に物資經濟の根幹を成す用紙統制に則ると共に、大局からの國策に順應する新日本文化の創造に進んで協力寄與すべき決意愈々固きを信じてやまない次第です。私は第一書房設立以來十五年、一意或る理想をもつて出版を續けて來たのでありますが、特に今日に於いて一層、良書出版の意義とその必要の大なるを思ひ、出版報國を第一義とする戰時體制版の刊行に邁進するに至つたのであります。

現代日本の出版界はその量に於いて、又種類に於いて世界の出版國の一つであると言はれて居りますが、その質に於いては果して何うでありませうか、名を大衆にかりる俗惡趣味橫溢の娛樂雜誌や婦人讀みもの類の跳梁跋扈は、どう贔屓目に見ても一國文化の伸長にプラスするものとは考へられないのであります。慥ふに大衆化とは徒らに大衆に阿ねる事ではなくして、實に名著をもつて大衆を引き上げる事でなくてはならないと信じます。それ故に、私は此の戰時體制版を引提げて敢然と之れに對處しようと決心したのであります。從つて本體制版はその點・特に留意して、今日及び今日以後の日本人が、日本人として起つ上に是非とも必要な萬人必讀の書を、精神の糧として供給することをもつて使命とするものであります。

斯くして自然・本戰時體制版は、思想・藝術・宗教等の文化の各方面に涉つて、古今東西を通じて現代日本に最も緊要にして重大意義ある名著のみの普及を計るものであります。

今や史上未曾有の重大時機に際會してゐる私達は、國をあげて長期建設に邁進して居ります。而も戰後と雖もなほ國力總動員を要し、所謂『常在戰場』の氣力が飽くまで必要であることは言ふまでもなく、私が聲を大にして本シリイズを戰時體制版と呼號するのも此の意味に外ならないのであります。我々は更ら に前線銃後を打つて一體に結び、これをもつて事變中の用意修養に資し、戰後の準備を忘らず、日本人としての確乎たる脊骨と肚とを發つて新日本文化の建設に資し、進んでは來るべき東洋文化ルネッサンスの分擔者たるの實をあげたいと念じてやまない者であります。茲に微意を披瀝して天下幾百萬讀書子の聲援を冀ひ、熱意ある支持を衷心より希望してやみません。（昭和十三年九月）

戰時體制版

杉浦重剛謹撰 選集 **倫理御進講草案** 四六判四四〇頁 定價七十八錢

中里介山著 **大菩薩峠** 第一冊 四六判四五七頁 定價七十八錢

中里介山著 **大菩薩峠** 第二冊 近刊

土田杏村著 **人生論・宗教論・人間論** 四六判三九四頁 定價七十八錢

小泉八雲著 戸川秋骨譯 **神國日本** 四六判四〇〇頁 定價七十八錢

高神覺昇著 佛教聖典 **般若心經講義** 四六判三一一頁 定價七十八錢

山田靈林著 **禪學讀本** 四六判三二五頁 定價七十八錢

ベアル・バック 新居格譯 **大地** 第一部 第二部 第三部 四六判各四〇〇頁 定價各七十八錢

戰時體制版

ベアル・バック 深澤正策譯 **母の肖像** 四六判三三八頁 定價七十八錢

ベアル・バック 深澤正策譯 長篇小說 **母** 四六判三三七頁 定價七十八錢

マーガレット・ミッチェル 深澤正策譯 **風と共に去る** 第一卷 第二卷 四六判各五〇〇頁 定價各七十八錢

マーガレット・ミッチェル 深澤正策譯 **風と共に去る** 第三卷 近刊

アンドレ・ジイド 堀口大學譯 **ソヴェト紀行修正** 四六判二八〇頁 定價五十八錢

鎌田研一著 長篇小說 **石川啄木** 四六判四〇〇頁 定價七十八錢

林房雄著 長篇小說 **青年** 四六判四二七頁 定價七十八錢

林房雄著 長篇小說 **壯年** 第一部 四六判四三四頁 定價七十八錢

戰時體制版 集選

倫理御進講草案

杉浦重剛 謹撰

現下ノ非常重大時期ニ於テ杉浦大人誠忠ノ結晶タル『倫理御進講草案』ノ發行セラレタルハ國民精神作興ノ上ニ裨益スル所偉大ナルヲ信ズ今ヤ思想的銃後ノ守リヲ固ムルコトノ一層緊要ナル秋ニ當リ本書ノ廣ク天下ニ普及センコトハ予ノ衷心ヨリ希望シテ已マザル所ナリ

公爵 近衛文麿

烈々たる日本精神の眞髓を傳ふる曠古の書にして、而も倫理の大本より季節、風物など自然觀照の妙諦、學藝、農産、工業、更に古今の偉傑、内外の典籍に及ぶ、知識の深き勸めと、德の高き教への渾然たる結晶、正に萬人必讀の國民讀本!!

＊戰線と銃後を結ぶ戰時下出版の第一義を高揚せんとする我が社「戰時體制版」の根本精神に贊助せられ、玆に杉浦重剛先生謹撰にかかる『選集 倫理御進講草案』刊行の運びとなり、本戰時體制版が名實共に國民必讀のシリーズとして千鈞の重味を加へ得たことは、衷心から欣快に堪へないところです。

＊『選集 倫理御進講草案』は長れ多くも 今上陛下東宮殿下に在しませし時、天台道士杉浦重剛先生が前後七ヶ年に亙り、倫理を御進講申し上げた草案であり、烈々たる日本精神の眞體を傳ふる千載の貴重書、その内容は倫理の根幹より發して、自然觀照の妙諦、學藝、農産、工業等文化の理解、古今の偉傑、内外の典籍の精神を說く、學德共に一世に冠たる先生の全人格の結晶といふべきもの。

＊いまや戰時下日本の現狀に卽して國民全體を打つて一丸とする强き精神力のいやが上にも高揚せざるべからざるの時、更に大陸發展の第一線に立つ、世界的日本人として高き敎養の一層力ある向上の求められつつある時、我が「戰時體制版」が欣然玆に杉浦先生鏤骨の遺業を以て天下待望の聲に答へんとする!!正に曠古の盛觀ともいふべく、我が社は全國民必讀の名著として、全機能を集中して本書の普及運動に勵員、いまや猛然たる反響、怒濤の如き註文に答へんがために全力を擧げて感激の努力を誓してゐる。

戰時體制版

人生論・宗教論・人間論

土田杏村 著

一個の哲學者及び現代哲學史家として、土田杏村は獨自の業績を遺した。一個の文明批評家・社會思想家として杏村は押しも押されぬ一大權威であつた。一個の敎育學者として、杏村は高貴の使命を果した。一個の倫理道德の學徒として、杏村は力强い進步的な實踐哲學を示した。一個の宗敎學者として杏村は聖なる贈物を忘れなかつた。かくの如くわが杏村は文化學のあらゆる部門に涉つて、各々專門學者としてそれぞれ立派な業績を遺したのである。このこと自身全く超人的といつてよいのであるが、しかも更に驚くべき事には、それらの多樣性が所謂專門家流に各別に割據分裂することなしに、互に相寄り相助けてここに全體的敎養となつて廣く深く統合され、遂に土田學とも云ふべき、それ自身生きた大きな大系を組織する觀があるのである。

しかも、あらゆる學問の火は彼の人格によつてかきたてられ、同時にその火は彼の魂をとほして、民族的に點火され燃燒されたのである。從つて彼は飽くまでも捉はるることなき人生の鬪士であり、社會正義に燃えるひたむきな國士であり、そしてまた天成の詩人でもあつた。自然彼の學風には、若々しい情熱と烈々たる氣魄とが脈搏つと同時に、また東洋的な滋味豐かな風格があるのである。

思想生活二十有餘年、半生を不治の病と鬪つて、空手よく等身の著を遺した。その蘊蓄、その努力、その熱意、ただただ驚嘆の外ないのであるが、しかも最後に當つては、日々三十八九度の高熱と鬪ふこと數箇月、刻々死の迫まるを見守りつつ、瞑目の瞬間に至るまで述作を斷たなかつた彼の精神力！それは追想するだに悲壯の極みである。誠にわが杏村こそ身をもつて一生を鬪ひぬいた眞理の殉敎者であり、それ故にまた疑ひもなくかの偉大なる「人類敎師」の列に加はるべき一人であると信ずるのである。

長谷川巳之吉

日本精神文化の若き父!! 身をもつて一生を鬪ひ拔いた眞理の偉大な殉敎者!! 土田杏村の尤大なる全業中に燦たる三大代表作、人生論・宗敎論・人間論玆に蒐まる!! 世相現象を正視し、理想と現實を綜觀して人生に指標を與へる大文字!!

戰時體制版

神國日本

小泉八雲（ラフカディオ・ハルン）著
戸川秋骨譯

＊あの詩人的直觀と、熱情と、美に對する犀利にして叡智的な眼睛と、さうして偉大な蘊蓄と深邃剛玄な哲學的眞想とをもつて、日本の眞と善と美とを流麗滴るばかりの金玉の文字に生かし綴つたものは、ひとり小泉八雲（ラフカディオ・ハルン）を措いて他にはない。誠に先生の文章が一度現はれるや、蓬の絶海の一蜃島も、いまは忽ち『神國日本』として歐米人の前に燦然たる光を放つに至つたのである。日本が今日世界的地位をかち得た所以のものは、この世界人である一天才日本人の、一管の筆に負ふところの多いことを思はなければならない。

＊本書の原名は「日本を解釋しようとの試み」といふほどの謙遜な意味であるが、日本名『神國日本』といふ漢字が附記されてゐる。言ひ得べくんば、本書は實に日本に關する先生の卒業論文とも目睹すべきものであらう。その家族制度、祖先敬など日本固有の精神の論評に筆を起して、佛教儒教の傳來から基督教渡來に進め、その歷史的變遷と文化の推移をば仔細に考察して、更に日本の將來に論及する。

＊その暢達なる筆端と？その奔放自在融通無礙なる思索の驅使とは、先生の頭腦の如何に多角的なるかを示すものであつて、まことに日本の文化を根本的に研究せるものとして、他にその匹儔を見ない好個の文獻である。

＊さればこそ、この書が出版されるや、アメリカ海軍の當局は、世界屈指の日本研究の必讀書として、直ちに海軍將校以上には必ず讀ましめたと云はれてゐる。

本書を一讀する時、それもまた宜なる哉と感ぜざるを得ない。

＊我々はこの『神國日本』のなかに、日本の眞實相とその特異な位置を發見し、その日本獨特の精神が、如何に他の諸々の東洋思想に伍して優越せる地歩を占むるかを理解する。この書が日本精神の研究上、稀なる標準的權威たることは、今更ら贅說する要はないであらう。

アメリカ海軍の當局は本書を世界屈指の日本研究必讀書として、海軍將校以上には必ず讀ましめたと云はれてゐる!! 今や日本そのものの價値と權威を此書に依て再吟味し、日本民族の處すべき道を決意することは刻下の國民的義務である!!

戰時體制版

般若心經講義

佛教聖典

高神覺昇著

＊第一番乎が曾つての宗教革新運動の第一線に立つたことは周知の事實であるが、その實彈となつて全日本の知識層に猛烈な勢ひで喰ひこんで行つたのが本書です。今や時代は一變して、日本の黎明期となつた。日本の强さが科學的精髓の發揮と共に、人間的覺悟と力の强さにあることはいふまでもないが、さうした覺悟を不斷に培ふ糧として、最も直截に、心の底から理解できるやうに說かれたものが本書です。

＊一時代を動かした名著といふものは決して偶然からは生れない。かういふ內容を持つた書物が、どうしても出來なければならないといふ全國的な要望がますます高まり來つた際、さういふ眞望を全身的に感感し、全力を擧げてそれにぶつかつて行つた時代の先驅者のみが、新しき行路を指示し、萬人の渴望を滿たすのです。

＊高神覺昇氏の『般若心經講義』が正にそれでした。ラヂオによつて佛教の眞髓を傳へるといふ計劃が立てられや、氏は直ちに第一線に選ばれ、昧爽の二十分間、マイクを通じて全國の勤勉なる、敬虔なる生活人の明朗な同伴者となり、道案內者となつて、心ゆくまで佛教の眞諦を大衆化せられた。

＊ラヂオの講演から本書となり、その全國的反響は一躍本書を劃期的なベストセラアズに推しあげたのみならず、從來宗教問題と絶緣狀態にあつた新聞雜誌ジャーナリズムが、一齊に宗教欄、宗教問題にその紙面を開放するに至つた。この方面に於いて本書が日本文化に貢獻した功績も大きい。

＊特に最近、中央盲人福祉協會で、失明軍人への贈物として讀本器（トオキング・ブツタ）を作製した際にも、最初に本書が選定された。ある將軍の實驗談によると、「戰爭に一番强い兵隊は佛教の虛んな地方の兵隊だ」といはれたといふ。佛教の虛んな土地の人達は死に對して常に安心を得てゐるから、いざといふ時に決死の覺悟が直ぐ早く出來るのだ。この名著が戰時に特に意義ある所以も正にそこにある。

脈々と波うつ人間的な息吹きと感激!! 高神覺昇師の全人格によつて躍如、打つて一丸となされた聖典講義こそ、日本佛教の最高の手引草であり、我等の日常生活に不可缺な日本人的叡知の源泉にして且つ人生修養の不朽の結晶に外ならない!!

戰時體制版

禪學讀本

山田靈林著

＊禪は難解であり、坐禪を組んで悟りを開くことは高僧達士にのみ許された人生道であるといふことをきくにつけても、禪とは何か、禪が何故古來から日本の精神修養の大きな根幹となつてきたか、かういふことを誰れでも知りたいと思ふ。しかも、禪は、古來から戰場を己が死場所とするすぐれた武人の、私的生活に絶えざる緊張と同時に人間的な高貴な潤ひを與へてきてゐる。

＊本書は、一般人のために書かれた唯一の禪學入門であり、日常生活の、誰れの周圍にも必らず見付けることができる疑惑や反省や惱みや喜びやを通じて、禪の本質を說かれたもので、數年前初版刊行以來、非常な高評を以て迎へられてゐる。

＊例へば、目次を一見しても、「室內の風光」「憎愛を越えて」「以心傳心」「無常」「寂光淡々」「安居道場」「業力」など、孰れも親しみやすい文章の中に處世上の燈臺となり、羅針盤となる物の觀方や考へ方が示されてゐて、これてこそはじめて禪學が第一歩から體得されるのだと感嘆せざるを得ない。

＊（私は或る日、フト『禪の生活』といふ雜誌を開いてみた。ところがそれへ連載されてゐる山田靈林師の『禪學讀本』を讀んで非常に感歎し、之れを探し得た自分を愉快に思つた。「ム、私の求めてゐた禪學の新人といふのは正に此の筆者に違ひない」と快哉を叫んだ程であつた、といふのは、從來、我々の前にある多くの禪の書物は、專門的な、參禪しない人には眞く分らないむつかしいものが多い。これでは禪の妙味は、到底、新しい知識大衆の我我のものとはならない、と考へたので、玆に山田師を慫慂して本書を刊行する所以である）と第一書房主が、本書を刊行するに至つた奇緣を述べて居られるが、かうした驚異と感嘆こそは、本書を讀んだあらゆる人々を衷心から掉たずには措かないであらう。

＊卷末の「坐禪の實修法」は、常住坐臥の間に、禪を行ぜんとする人々のため、得がたき手引となるであらう。」

日本人には如何なる外敵、如何なる事變に逢つても、微動だにせぬ素晴らしい膽力がある。これこそ古來から武人が、日本魂の精髓として一日も修養を忘らなかつた禪の極致であり同時に日常生活の緊張に爽氣と雅致を生かす禪の第一歩だ。

戰時體制版

母の肖像

バアル・バック
深澤正策譯

此の母にして此の子あり

私は熱海ホテルの芝生に寢ころんでバアル・バックの『母の肖像』を讀みふけりながら、感極はまつて、ついむせび泣いてゐました。靖江府暴動（百六十頁）のあたりから、これが感泣せずに讀めるでせうか?! 全くバアル・バックは實に理想的な優しい母親を持つたものだと、唯々感激にむせぶばかりなのです。聰明で、明敏で、愛情ゆたかで、信仰心に厚く、熱情家でありながら一方勤儉の精神を忘れず、音樂的教養と、美に對する敏感と、天文に興味を持ち、歷史地理の常識と、家事料理に秀で、その上人間の最も美德とする思ひやり、下級の人（無智な支那人）には憐愍の情け厚く、やさしく、強く、そして、夫の天職の爲めに一生を捧げんとする其の犧牲的精神、之れ正に我々の理想的女性!!（私は始めて玆に自分の一生の憧れの女性を觀た）此の母にして此の子バアル・バックあることを惟ふと、私の全身は感激の血に湧き立つて、人生に對する新らたなる勇氣が百倍するのであります。

私は文化の爲めに「此の次に來るもの」といふ事を常に忘れる事の出來ない一人ですが、それには母親といふものが、えらくなつて行かないことには人間の精神的文化的向上發展はおぼつかない、といふ持論を持つてゐるのです。その一の論據は、えらい父親だけを持つた子供達は大抵軟弱、實力その父を凌駕し得ない社會の實跡に徵してそれは主張し得るのですが。

私は此の『母の肖像』を讀むに及んで一層その感を強くせずには居られなくなつたのです。女性が、玆に描かれた母の如くありなば、その子供は必ずや次の世代を立派にしてくれるといふ不動の信念を持ち得るのです。殊に私の如き無智な片田舍の漁村に育てられた野人にとつては痛切にそれが惟はれるのでせう。今や國をあげて緊張し、行き過ぎた自由主義思想を訂正すべき非常時にあたつて、此の『母の肖像』が刊行されたといふ事は、一つの天惠であるが如く私には考へられるのです。それは此の『母の肖像』が小說として描かれたと云ふよりも、一個の人間の生きた生活史として描かれたものだから。飛躍の日本が、文化の爲めに最も必要とするものは、此の『母の肖像』に描かれてゐるが如き女性なのです。どうぞ『母の肖像』を讀まれた方々よ、此の一個の女性＝母といふものの影響力が如何に大なるものであるかに深く思ひ及んで、我が國の女性教育に就て特に眞劍に考へて戴きたいと思ふのです。

長谷川巳之吉

戰時體制版

大地

第一部
第二部
第三部

パアル・バック
新居格譯

＊支那を知るためには、如何なる本を讀んだらいいか、それに答へるものはパアル・バツク夫人の『大地』です。日支事變の勃發と共に、俄然、世界は異常な關心を以てバツク夫人の『大地』熱流行を現出し、我國また本社の先驅的飜譯によつて既に代表作が悉く邦譯せられたゐた矢先きとて、玆に猛烈な反響を惹起した。

＊『大地』は支那を知る得がたき名著であるのみならず、これを小說といふ點、人間性の究極點を突いた文學としてみても、亦世界を驚異せしめる傑作です。バツク夫人が幼少の頃から支那に育ち、その夫君として支那農政の大家ロッシング・バツクと結婚しなかつたら恐らく本書は生れなかつたであらう。

諸家の絕讚

＊『大地』發賣と同時に谷崎潤一郎氏は「日本よ何故支那を書かぬか」と題し支那農民の氣質、思想、經濟力、生活樣式、家庭の狀態を知る名著として廣く世に紹介せられた。

＊續いて正宗白鳥氏は『母』を「文句なしに感心して讀み終つた」と批評され、馬場恒吾氏又『文藝春秋』に長文の『大地』讀後感を執筆され「讀了後これほど偉大な書物を讀んだことはないと感心した。私が青年の時から讀んで、私の一生を感化したと思はれる世界的名著の何れに比較しても劣つてゐるとは思はれなかつた」と感激され、帝大教授蠟山政道氏は馬場恒吾氏の一文に答へつつ、『婦人公論』誌上に於いて「大地の教訓」と題し、『大地』の女主人公は、自然的な數千年の歷史を持つ支那社會のヒロインであり「大地の地主として又やがてそれを更に覆却して分裂してゆく息子達（『大地』第二部）の生活こそ極めて重大な社會問題である」と鋭い批判を示され、德富蘇峰氏またバツク夫人が支那の現地に即して之を見、之を聞き、之を感じた」點を推賞され、諸名家口を揃へて『大地』が剱下國民總動員下の支那認識に如何に重要な名著であるかを推賞されてゐる。

＊パアル・バツク夫人の支那小說は、支那に關心を持つ外交、經濟、政治畑の名士間にも非常なセンセイションを惹起し、元遞相南弘氏が、友人知己に『大地』を推賞され、曾て『東洋經濟』主幹として、實際經濟の權威たる三浦鐵太郎氏は、元日銀總裁深井英五氏にこんないい本はないと推賞された。また支那經濟の權威高木陸郎氏は、「支那の社會事情を最もよく書いた傑作」と激賞された外、笠間昊雄、石川三四郎、白柳秀湖、石本靜枝、本多顯彰、北村小松、林髞その他の名士が擧つて、バツク夫人の眞價を賞讃された。

『大地』が全女性に與へた家庭的影響は、忍從の精神こそ凡てを超克する女性永遠の勝利だといふ尊い信條に外ならぬ。『大地』が男性の魂を摶つた反省は、良人のために一生を捧げる女性が如何に貴重なるかの感激に外ならぬ。『大地』が農村に及ぼした社會的意義は、須らく土に歸つて大地を愛せといふ永久不變の眞理である。さらに『大地』は支那の風俗、生活、國民性を知る唯一書として全世界が競つて飜譯し、現在世界で最も多く讀まれてゐるベスト・セラアズの首位を占めるに至つてゐる。

『大地』第一部

パアル・バツク夫人の支那小說の一切の出發點が玆に發してゐる。內亂と飢饉とを繰返す支那四千年の苦惱を身を以て突き抜け、一介の農夫から巨萬の富を成す勤勉刻苦の主人公王龍に配するに、この夫のため運命の苛酷な試練を靜かに諦觀して死んでゆく妻の阿蘭。支那の恐ろしさが魂の底まで泌みわたる。こんなにしなくては生きて行けない、なんといふ支那の現實であらう。

『大地』第二部

『大地』第一部、主人公の王龍の一代が終るところ——丁度、映畫の「大地」が終つたところから「息子達」の時代がはじまる。巨萬の富を分配された息子達が、地主と軍人と商人となつて活躍する。玆でバツク夫人は、近代支那の軍閥の成長した過程と、その現在の勢力を徹底的に解剖し、追究する。支那軍閥が到る處で波瀾を惹起する、息もつがせぬ小說的な面白さ!!

『大地』第三部

『大地』はさらに三代目に進む。大地から生れ、大地を讃美して死んで行つた王龍の末裔が、大地を離れ、現代の錯雜した文明に蠶食されて、つひには分裂し、沒落してゆく過程が描かれてゐる。本篇の主人公はアメリカに留學した新時代の水先案內である。支那の知識階級が東西文化の乖離に如何に惱むか。彼等に果して黎明が來たか。モダン、チャイナの徹底的な解剖!!

＊某總裁の手紙＝映畫を見たら急に本が讀みたくなり、早速本を讀んだところ、正しく噂に違はぬ傑作で、一讀再讀興味つきず隣邦支那の認識にはこれあるのみと妻にも讀ませ、毎日夫婦で『大地』の話ばかりいたします。小說といふものが斯ういふものなら、小說に對する認識を改めなければなりません。一讀者として深甚の謝意を表します。

『大地』以來支那小說の流行時代を現出したが、何といつても世界が一齊にこれを飜譯し、支那小說の最高傑作と推してゐるのは『大地』あるのみ。現地でも盛んに讀まれて引張凧です。慰問袋には缺かされぬ一劇です。

戰時體制版

母

パアル・バック
深澤正策譯

＊パアル・バック夫人の名聲は、『大地』三卷によつて確固たる地盤を築き、その支那描寫に於いて、更にその小說家的天才に於いて世界的名聲を獲得したが、『大地』につづいて發表された『母』によつて、バック夫人はその嚴肅なる女性觀と、生活の奥底に掘り下げた女性心理と人間性によつて、夫人が單なる支那小說家に非ざることを如實に證明した。『母』は直ちにフランス譯となり、つづいてソヴェトでも飜譯された。

＊夫の逃亡によつて全家族を支へゆく支那貧農の妻の一生を描き、前人未踏の現實たる、暗黑と神秘とに覆はれた農民生活と赤裸なる性本能の原始的なる悲劇を抉る!! 貧農の「女の一生」がいかに苛酷な道であるか、女性が自由と空想を奪はれ、自然の暴威と闘ひ、伸びゆく我子達を見守る。世界を感激させた傑作!! これこそ、まさに支那の女の一生である。

『大地』三卷によつて世界の支那觀を根本的に變革し、ノオベル賞の世界的榮譽を授けられたパアル・バック夫人が、更に支那貧農の妻の一生を描き、深刻なる女性の現實と運命を世界の輿論に訴へた! これは支那の『女の一生』である!!

正宗白鳥氏評

この頃讀んだ小說で最も感動したものは、パアル・バックの『母』である。文句なしに感心して讀み終つた。坦々と敍されたものであるが、平凡な女の一生をこれほど明らかに讀者に示したものはちよつと類が無いやうに思はれる。支那の農民の人と生活を描いたもので、日本の農村が連想されて一層興味が多い。作者が女性であるから女の心理がよく分つてゐるのであらうが、創作態度がはつきりしてゐて、悲慘な世相に對しても感傷に捉はれず、心が萎けてゐないのは女性作家離れがしてゐる。

＊

白柳秀湖氏評

女でなければ書けぬ男の未知の世界、實に息もつかせぬ面白さでした。『大地』と共に、私のこれまで讀んだどんな支那の旅行記よりも、どんな支那通の支那談よりも、更らにどんな對支政策論よりも深刻なものだと思はれました。

戰時體制版

風と共に去る

マアガレット・ミツチエル
深澤正策譯

＊『大地』の作者パアル・バック夫人の出現によつて世界の讀書界を驚異せしめたアメリカの文壇は、續いて『風と共に去る』の若き女流作家マアガレツト・ミツチエルを生んで、更に大きな賞讃の旋風の的となつた。

＊『風と共に去る』は、尨大原稿紙三千枚、アメリカの內亂を題材として、熱烈火の如き戀愛あり、敬虔神に對する如き純情あり、戰爭が生むあらゆる困難の描寫と、その中に敢然と進む人間性の强調、さては戰前より戰後に及ぶ社會、經濟の激動する轉變等、過去の偉大なる小說がその內容として一世を風靡したありとあらゆる要素を打つて一丸とし、しかもその人物と時代背景等とが神技に比すべき筆力によつて精彩に描寫し盡されてゐる。

＊作者マアガレツト・ミツチエルはまだうら若き女性、七年に亙つて當時の史實を調べてつひにこの大作を完成したといはれる。

＊本書が現はれるや、直ちに英米文壇の傑作を以て目され、さきに『大地』を推賞したアメリカ唯一の文學賞パリツツア賞が授與され、讀書クラブの推薦書となつたことは勿論、現在までにその賣上げ二百萬部を以て數へられ小說界かつてなきベストセラアズの最高記錄をつくつてゐる。

＊名作は單なるストオリイの興味によつて價値あるのではなく、その小說の全體に亙る史實や會話や風俗の末々に到る獨自の雰圍氣を俟つてはじめて渾然たる光輝を發揮するは言ふまでもない。名作を名譯によつて出版することは我社の第一信條たるのみならず、苟くも飜譯と名づくべきものの根本唯一の條件たるは言ふまでもない。

＊譯者深澤正策氏は、かつてアメリカ南部に滯在され、特に南部黑人の俗語に關しては他の追從を許さざる專門家として、正に『風と共に去る』打つて付けの適譯者。玆に本格的完譯の上梓と共に、名作のみが持つ豐かなる情緒と雰圍氣とは、心ゆくまで讀者を魅了せずんば止まないであらう。

世紀の大小說を以て呼ばれ、尨大原稿紙三千枚に及ぶ戰爭と戀愛のクライマツクスを描ける『風と共に去る』こそ、『大地』と共に現在世界を風靡する二大双璧として一九三六年度パリツツア賞受賞、現在英米で二百萬部を賣つてゐる!!

戰時體制版　ソヴェト紀行修正

アンドレ・ジイド
堀口大學譯

＊ソヴェトは資源に於いて軍備に於いて益々尨大なる生産と充實とを計劃しつつあるが、一方その國家組織と人的要素の矛盾から、今や救ふべからざる混亂に陷らんとしつつある。

＊世界の全ジャーナリズムの焦點は、正にスターリンの將來とソヴェトの軍備に集中されつつあるが、しかもこの際、最も肝要なのはソヴェトの國民が現在如何なる狀態に置かれてゐるかといふ事實であり、國民生活の現實そのものに外ならない。

＊アンドレ・ジイドはフランスに於けるも人民戰線の結成と共に、自らの思想的轉向を聲明し、つづいてソヴェトの文豪ゴーリキイの死に際して、國賓としてソヴェトに迎へられ、あらゆる方面から想像も及ばぬ歡迎を受けた。それにも拘らず、自己の眼によつて視、自己の耳によつて聽いたソヴェトの現實と、ソヴェトの國民の言葉とは、果してジイドに滿足を與へたであらうか、その回答は否であつた。

＊『私にとつて私自身よりも、ソヴェトよりも、ずつと重大なものがある。それは人間性であり、その運命であり、その文化である』さういふ至高の使命から發せられたジイドのソヴェト批判は、刊行早々數ヶ月にして二百版を數へ、世界の思想界の驚然たる問題の書となつたが、ジイドの批判は必らずしも、それによつて正しい理解を以て迎へられたわけでなかつた。

＊ここに再びジイドは、その前著に於いて言ひ得ざりしことを、赤裸に表明して、自己に與へられた誹謗に答へんとした。『ソヴェト紀行修正』は、正にジイドが生命を賭した宣言であり、その爲にはジイドは前著に於いては發表し得ざりし多數の材料と事實とを本書に於いては思ふままに驅使してゐる。

＊人類の幸福と正義のためかくまで激しい精神の闘ひを挑んだジイドの心境こそ、ジイドの偉大さの究極の發展であり、同時に政治と文化の中間に苦闘する歐洲知識階級の深刻なる告白として現下必讀の名著たるを失はない。

ソヴエトの國賓として迎へられた文豪がソヴエトの社會的缺陷を徹底的に指摘して何故かくも苛烈な反駁を書かねばならなかつたか。これこそ大ジイドが世界の喧々囂々の聲の中に敢然放つた正義の矢だ。些かの虚飾もなきソヴエトの現實だ。

戰時體制版　石川啄木

鑓田研一著

＊これは著者の多年の苦心になる堂々八百枚の大長篇小說である。從來の傳記小說の型を破り、全く斬新な形式によつて啄木の生涯とその歌とを巧みに織りまぜて、息もつがせぬ興味で讀者を最後まで引つぱつてゆく。これ以上に啄木を見ることは不可能である。作中に出る歌は、歌だけ離して讀んでは感ぜられぬ意味と强さを帶びてゐる。夭折せる天才啄木は、ここに初めてその全き姿で甦つた。

＊

小林橘川氏評

鑓田氏の小說『石川啄木』を讀んで私は啄木といふ人間を見直したのである。彼の生涯の全生活を通ずる懊惱と苦悶と野心と努力と、これらの一切を交錯したる人間啄木を、はつきりと私に見せてくれたのである。

讀み始めてみると、私は深い感動をもつてこれを讀み續けた。そこには天才詩人啄木の面影といふよりも、煩惱にみちた人間啄木の平凡な姿が痛しく私に映ずる。「おや啄木はやつぱり僕と同じ人間だつた」といふ親しみ深い感じが、到るところに發見される。いつのまにか私は、私の凡人としての姿を、啄木に見出したことを嬉笑ましい氣持ちで眺めてゐるのである。

戀愛と耽溺と、虚無と、絶望と、野心と、光明とのとりどりの響奏が、彼をめぐつて展開する。これは私たちに共通するある時代のきまりきつた生活の型である。それは時代が十年古くてもいけない、十年新しくてもいけない。さうした同時代の、同一空氣が、私たちの胸をしみじみと打つのである。

この小說『石川啄木』を讀んでゐると、いつのまにか、知らず知らず、私自身が彼の持つてゐた天才的な高い調子に引きあげられて、私自身が天才的な生活を現にやつてゐるやうな感激に浸るのである。さうした魅力が、この著書から感じ得られるのである。これは凡人の錯覺に過ぎないが、さうした興奮を豐かに私に與へてくれるこの著者の筆力は、また驚嘆すべきである。

不世出の天才詩人、石川啄木の生涯を描いた堂々八百枚に亙る大事實小說!!　啄木を生んだ時代!!　啄木をめぐる人々!!　これこそ、日本近代思想黎明期の赤裸々なる文壇裏面史である!!　情熱の歌人、啄木は今こそ高らかに生きて歌ふ!!

戰時體制版　長篇小說

青年（改作決定版）

林房雄著

作者の言葉

『青年』の決定版をつくることは、私の長い望みであつた。作家はそれぞれ愛する作品を持つてゐる。わが愛する作品よ、いのち永かれと願ふのが作家の心であるとすれば『青年』は私の最も愛する作品である。

初版以來、既に六年を經たが、更に十年の命をこの小說に保たせようとするならば、新しく筆を加へなければならないと考へてゐた。その機會がいま長谷川巳之吉氏によつて與へられたことを、私はこの上もなく喜ぶ。

理想が捉へるものが青年であるならば、また青年がのも理想である。げに歷史を創造するものは時代を双肩に擔ふ青年の巨大な掌だ!!　新らしき立場から明治維新を活寫した超巨篇、畢世の大野心作『青年』の改作決定版遂に成る!!

＊多くの思想が日本列島の岸を洗つた。そして、ある思想は海嘯のごとく、日本の全土を被ひつくすかのやうに見えた。だが、波は日本を洗つて、ただ、日本の秀麗さを增すことにのみ役立つた。『**青年**』の主題は、この强靭なる**日本の本質の探索**にある!!

＊獨房の中で、作者は日本の海の夜明けを描いた一枚の繪を見た。その時、作者の心は海のごとく湧きたつた。作者をしてこの物語の筆をとらせたものは、日本の民衆の胸に共通する愛するものを奪はれた悲しみ、美しいものを汚された怒りである。今こそ、作者は祕められた繪卷の封印を切り、汚された日本の人と自然の中から眞實に美しいものをほりだし、誇りと確信とをもつて人々の前に繰りひろげる。**日本の自然の美を全身をもつて感じ得るものみが、日本人の胸にひそむ高きものに己れを捧げる誇らかな精神を承け繼ぐものだ。**

＊元治元年――西歷一八六四年――近代文明を誇る四國聯合艦隊の惡魔のごとき姿が、まさに馬關砲擊の火蓋を切らんとするとき、家國の砲門の前に身を投げだした青年伊藤俊輔と志道聞多の姿を見よ。新らしき祖國愛に燃える封建日本の殼を破つたこれら若い魂は、作者の渾身の熱情を傾け盡した筆端に火花を發して、ここに一大抒事詩を展開する。これこそ、新らしき立場から明治維新を活寫した超巨篇、著者畢世の大野心作である。

戰時體制版　長篇小說

壯年

第一部　林房雄著

＊これは『青年』の續篇である。『青年』の年代は、文久三年と元治元年であつた。『壯年』は明治十四年より二十三年に至る時代である。

＊參事院議長に就任した伊藤博文は四十そこそこの壯年であつた。西園寺公望はヨーロッパから歸つたばかりの若盛り。今こそ繁華を誇る銀座通りに、空屋が多くて困るといふ頃の日本を主題にしたのが、この大長篇小說である。明治維新の大業は、一先づ段落がついて、愈々これからその新らしい第一歩を踏み出さんとする日本、まさに壯年日本の心臟を抉り、その大動脈を探らんとするのが、この小說の含む大野心である。この小說こそ、我々日本人の何人も忘れてはならない生きた歷史である。調べ上げ、生かしぬいた大歷史小說の面白さ!!

小林秀雄氏評

『壯年』がどの樣に發展しようがこの作の最大特色となるものは、それは『青年』以來いよいよはつきりして來たこの作者の熱意だ。わが國の近代小說につき纏つてゐた描寫主義、告白主義、心理主義等々の衣を脫いで、新しい思想小說を創り上げようとする熱意である。『青年』でもさうであつたが『壯年』でも諸人物の私的生活といふものは殆ど顏を出さない。一切は思想に憑かれた諸人物の思想的交渉で統一されてゐる。

美しい場面は必ず肉體と肉體との交渉ではなく、觀念と觀念との出會ひとなつて現はれてゐる。さういふ處にこの作品の見逃す事の出來ない特色があり、また新しさがある。

久野豐彥氏評

現代小說家には多くの技術的に勝れた作家を見出すことも困難ではないが、小說をして單なる義理人情の世界から飛躍せしめ、人間の個人生活と共に社會と時代を描かうとしてゐる作家は極めて稀であり、ここに『青年』『壯年』を携げて立現れた林房雄を見出すことは現代文學のために喜びとせざるを得ない。

エポック・メーキングとは正に此の如き大作を指す!!　壯大な出發と偉大な建說!!　躍動する巨體日本と堂々四つに組み作家的生命のすべてを賭して書き上げた作者畢生の大小說!!

388
16

終